

埼玉・教会・壮年

NO. 12号 2013年2月発行

「いまこそ『つながり』の時」

—共に苦しみ、共に喜ぶ—

「苦難をも引き受ける私たちの祈り」

「関東教区内教会の連携、再構築へ」

「神の愛の中で歩むアジア学院の震災復興」

「今、再び東日本大震災に向き合う」

もう2年になる。もう2年ですか。そう、2011年3月11日から日数数えて2年。東日本大震災をこの身に体験した。復旧、復興がそれなりに進んではいるものの、遅々として足踏み状態の歩みの側面も。津波で折り重なった車、倒壊した家屋の瓦礫、山里にまで押し寄せた船体は大地から消え、一見すっきりしたように見える復興への途上で、東電福島第一原発の放射能被害でいまだに故郷に戻る道筋の見えない避難・警戒区域の住民をはじめ、愛する肉親を失い心に傷を負った人々の見えない内面の完全復興はまだまだ先だ。

時間や歳月の流れと共に人々の記憶は次第に薄らぎ、あれほど熱く語られた「人間の絆」もいつしか緩んでしまう。寄り添って共に苦しみ、共に喜ぶというお互いの人と人とのつながりが今こそ求められている中で、キリスト者は神との絆を再構築、今生きていることの喜び、感謝を被災した方々と共に分かち合いたい。私たち地区壮年部は今、再び東日本大震災と向き合うことにした。関東教区内で24教会が何らかの被害を受け、水戸中央、宇都宮など4教会が建て替えに追い込まれた。教会幼稚園は園児の退園と被災地園児の無料受け入れで経営危機に。アジア・アフリカ諸国の草の根で活動する農村・農業指導者を日本に受け入れ、養成するキリスト教主義で運営するアジア学院も壊滅的被害を受けた。関東教区副議長の飯塚 拓也竜ヶ崎教会（茨城）牧師に教区内教会の現状を、大津 健一アジア学院校長に地震が起きた時の状況と復興の歩みについて語っていただいた。

開会礼拝「苦難と希望」—地震・放射能被害に向き合っ—

「なぜ！この私に、私の家族に…起きたのか」

「苦難をも引き受ける私たちの祈り」

「苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生む」

「神が共にいて下さるとい希望と感謝」



講師：大津 健一 アジア学院校長

昨年(2011年)3月11日の東日本大震災によって、東北地方の方々の中には地震の被害で、あるいは一瞬のうちに津波で、家族や家屋を失った多くの人々がおられる。いまだに仮設住宅に入って先の見えない生活をしている多くの方々がいることを私たちは知っている。なぜ、この私の家族に、この私に、そのようなことが起こったのか。この問いかけはこれからも長く続く問いであり、すぐに解決の道筋が見えるとかいうものではない。人々の痛み、心の中の深い傷は、トラウマとして残っていく。これからもずっと続いていくことだろうと思う。

「共通の課題」

なぜ人は苦しみを受けるのか。どうすればその苦しみをくぐり抜けて希望の光を見出すことが出来るのか。それは私たちにとっての共通の課題である。誰か他の人たちの課題というのではなくて、この私にとっても同じ課題だ。起こった問題の大きさやその深刻さは別だが、私たちアジア学院においても昨年3月11日の震災及び放射能

被害に直面した。あの時私が抱いた思いは、何故このことが今、この場所にいる私に起こったのかということであった。聖書を通して示される私たちの信仰は、苦難を避けて通らせてくれるものではない。

「神への絶対的な信頼」

神道や仏教にはお守りというのがあるが、私たちの信仰は、私たちの人生にとっての苦難を避けて通らせて下さるお守りのようなものではない。キリスト者といえども同じ苦しみに直面させられる。東北地方の被災を受けられた教会の皆さんが直面しておられる現実はその現実である。私たちはしばしば祈りの中で神様に、「私の健康を守ってほしい」とか、「家族を守ってほしい」とか、「私の生活を守ってほしい」という祈りをする。そのような祈りは本当に深いところで、神様に絶対的な信頼を置くものでなければならぬ。私たちの祈りは、私たちに与えられる幸せだけではなく、苦難をも引き受けるものでなければならぬと、私は考えている。それだけでなく、私たちは

キリスト者であることによって他の人にはない苦難をも引き受ける覚悟も必要である。

「私たちの信仰の確信」

詩篇第23編の中で詩人は「死の陰の谷を行くときもわたしは災いを恐れない。あたながわたしと共にいてくださる」と、語っている。私たちの信仰の確信はこの詩人と同じように「たとえ絶望の淵にあっても、その中で神が共にいて下さる」。私たちは絶望の淵にあるときはともすれば、先が見えなくなったり、思い煩いのために眠れないとかの悶々たる日々を過ごす。しかし、詩篇23編の詩人は苦しみの中にあっても「神がそこに共にいて下さる」と語っている。それが私たちにとっての「希望の言葉」だ。「希望のしるし」だ。

「主イエスのとりなし」

主イエスは、神が私たちと共にいて下さるようにとりなしをして下さる。私たちと神とのとりなしをして下さっていることを、今回の経験を通して教えられてきた。

きょうのローマの信徒への手紙5章1節から5節までのパウロの言葉「このように、わたしたちは信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ており、このキリストのお陰で、今の恵みに信仰によって導き入れられ、神の栄光にあずかる希望を誇りにしています。そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。希望はわたしたちを欺くことはありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛が

わたしたちの心に注がれているからです」は、私に対しても、あるいはアジア学院に対しても大きな励ましを与える言葉だった。

「自分の弱さを通して働く神の力」

パウロは自分の強さではなく、自分の弱さを通して働く神の力、そのことを私たちに、教えている。私たちの弱さを通して神が働いて下さる。そのことの中でこのローマの信徒への手紙5章3節の言葉は私たちに語りかけているように思う。苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを知っている。そのことを私たちに語っている。私はこの間、震災後のアジア学院が直面する苦難の中で神が共にいて下さり、私たちを支えて下さっているという思いに立って、きょうはこの場所に立たせていただいている。

「主にある希望」

私たちの希望は、私たちの中にあるのではなく、私たちを支え、導いて下さる主にある希望、それが私たちに与えられている希望だと考えている。私たちを今まで導き、また支えて下さった神に感謝する思いを強くしながら、東日本大震災後の私たちの経験を分かち合うことによって、苦難は希望に続くことを少しでも伝えることができれば感謝である。一言祈ります。

神様、私たちの苦難の中であなたは私が共にいるという確信の中での歩みができるように、またそのために教会がその働きを続けることができるように。主の御名により祈ります。アーメン。

主題「苦難と希望」—地震・放射能被害に向き合って—

「その瞬間—窓ガラスがババババーン」

「しゃがみ込む外国人スタッフ—パニック状態に」

「東日本大震災被害総額は5億3千万円」

「募金で新校舎が完成」

「アジア諸国の農村指導者養成に今後も貢献へ」

「キリストの愛に支えられて歩むアジア学院の震災復興」

アジア学院アジア農村指導者養成専門学校 校長 大津 健一 先生



昨年(2011年)3月11日の東日本大震災が起きた時、私たち職員は新年度の学生を迎えるための話し合いをホールや食堂のあるコイノニア棟下の会議室で開いていた。いつもよりも地震の揺れが長く続いた。

「素足のまま飛び出す」

一人の職員の「外へ出よう!」という呼び掛けで全員その部屋から素足のまま飛び出した。その瞬間、窓ガラスがババババーンと音をたてて割れ出した。鉄骨2階建ての本館やコイノニア棟は外壁が落下寸前で、危険で使用不可に。特にアジア学院は地盤が弱いせいか、敷地内に大きな地割れや陥没が起こり、野外ステージは崩壊、養殖池が破損した。揺れが激しく、立っていられなくてみんなしゃがみ込んだ。外国人留学生は前年の12月に卒業、既に帰国しており、学院の中に居たのは日本人職員や外国人の

ボランティアスタッフだけだった。そこにいた人たちにはけががなく幸いだった。

「情報が錯綜」

大震災翌日の12日には強い余震が続いた。同じ日に東京電力福島第一原子力発電所では水素爆発が起った。このような緊急事態の中では情報が錯綜する。特に海外のニュースを聴いている人たちには尚更である。日本人であれば、NHKニュースを聴くなどして情報を得ることによってある程度の情報の共有ができるが、海外から来ている人は別である。ドイツ人はドイツからのニュースを聴いていたようにそれぞれの国から発信されたニュースを聴いていた。海外のメディアから「日本は危険だ」のニュースが流れていて、アジア学院では、「もう、こんな所にはおれない」、「一刻も早くここから退去しなければならない」と半ば

パニックのような状態が作り出された。また日本人の中には、政府や東電の出す情報を信じられないという不信感が人々の不安を掻き立てた。これは3月12日の時点の状況だ。

「母国から帰国命令」

ドイツからきたボランティアには、ドイツの派遣団体から帰国命令が、アメリカのボランティアにも同じく帰国命令、またフィリピンから来ている研究科生は、フィリピンの家族から「そこにいるべきではない。すぐに帰って来て」という声が送られてきた。また、日本政府や東電から発信されるニュースには、日本人を含めてドイツ人もアメリカ人も信用していなかった。ドイツやアメリカなどからの情報によってみんなの動揺がアジア学院のなかで起きた。まさにパニック状態であった。

「地震・放射能被害に向き合う日々」

東日本大震災後、そして放射能被害のことが分かって、大変混乱しながら考えたことは、この場所からどうやって立ち上がって行くのかを考えてきた。これまでの私たちの苦しみとか、迷いとかを忘れてはならない、と思っている。同時に東北地方の中で一生懸命歩んでいる人たちや教会の人たちの苦しみを忘れてはならない。アジア学院のことだけを考えているようではダメだと自分に言い聞かせている。しかし、その苦難の中で、そこからどうやって希望を見出すことが出来るのか、それは東北にいる人たちにも同じ課題である。現在私たちは地震・放射能被害に向き合っている。

あの時私自身何をどうして良いのか分か

らなかった。政府の無策な対応を批判するのは簡単だが、自分の足下で起こっている事柄にどう対応するのか、それが問われた。その点ではリーダーとして不十分だったことを反省している。それからもう一つの問題は、外国人をこのような災害時にどう守るのが問われた。私たち日本人は、日本で起こったことについての情報は日本のメディアを通して自然に入ってくるのは事実だが、外国人たちにとったら誰かが説明しないとその情報は何であるかは伝わらない。

「震災時の外国人への対応！」

私たち自身もよく分からない状況の中で、かなり動揺して、どうしようかと思っている中で、外国人に対する的確な対応が取れなかった。これはきっと日本に住んでいる他の外国人にとっても、同じようなことが起こったと想像している。津波の情報、避難場所、食糧の配給などについて丁寧な説明があったのだろうか。ガーナから来ているスタッフは、「僕たちを置いて日本人スタッフだけがどこかに行くのではないかと不安に思った」と後になって話してくれた。そんなことは考えもしなかったこと。また、アジア学院は福島原発から110km^{*}離れている。しかし、海外のメディアの中には200km^{*}圏内は安全ではないという情報をすでに流していた。だから学校の中には、全く安全でない所に私たちは居るという認識があった。

「アジア、アフリカからの学生」

アジア学院は毎年アジア、アフリカ、太平洋諸島などから約30人の学生が来ている。今年は、アジアから17人、アフリカ

から7人、中南米のブラジル、大地震の被害を受けたカリブ海のハイチ、パプアニューギニアから各1人、そして日本から2人の計29人の学生が来ている。さらに研究科には日本人1人、トレーニングアシスタントとしてインドネシア、フィリピンから各1人、合わせて計31人である。日本人学生の場合は、大学を卒業したものや休学して学ぶものなど様々である。

「草の根の現場で働くリーダー」

また海外から来る学生は、アジア、アフリカなどの草の根の現場で働く中堅リーダーである。彼らは、個人としてではなく、教会や非政府組織(NGO)に属し、そこから派遣されることを基本としている。アジア・アフリカなどの農村に住む人々の自立を目指すリーダーの育成が私たちの主要な働きである。アジア・アフリカが貧しいのは、いつも先進国によって豊かな資源などが支配されているからである。アジア、アフリカの人々が自立できる状況をつくること、人々が食べることが出来る状況をつくり出すために循環型農業を大切にしている。食糧増産という名目で奨励されている近代農業は、タネを買い、農薬や化学肥料を買いねばならない仕組みを作り上げている。それに対して自分たちの村にあるもの、牛や鶏や豚の糞とか、草や落ち葉などを集めて堆肥を作って持続可能な有機農業を奨励している。

「共に生きること」がモットー

「共に生きること」が私たちのモットーであるが、アジア・アフリカなどの人々と共に生きる世界をつくりたいと願っている。

「世界の10億人が飢餓状態に」

ご存知のように現在世界人口は70億人となり、このうち10億の人々が飢餓の状態に置かれている。その大半の人々はアジア・アフリカなどの貧しい農村に住んでいる。貧しい農村に住む人たちの自立を助けるためには、農村開発に携わるリーダーが必要である。

「圧倒的に教会の力が支え」

私たちの働きは、主に教会の皆さんによって支えられてきた。もちろん支援を下さる団体や個人の力添えはあるが、圧倒的に教会の力によって40年間支えられてきた。公的な支援を受けずに40年間やってこられたのは神様の働きによるものだと考えている。また、学生は3月末に日本にやってきて、4月初めから12月第2週の土曜日の卒業までの8カ月間集中した形で学びを続けている。そして卒業後すぐにそれぞれの国に帰ってもらう。この国に残って仕事を探すとか、日本で何かをしようとかの期待は一切ない。再び元の場所に戻って、彼らの働きを続ける。そのことがとても大切なことだと考えている。

「“魚の取り方”を教える」

「魚を与えるよりも魚の取り方を教える」ことが開発援助にとって大切だといわれているが、先進国による政府開発援助(ODA)で、いくらお金を注ぎ込んでもアジアやアフリカの貧しい農村に住む人々の生活は向上しない。

戦後この方ずっと世界の先進国がお金を出してサポートしても結局、世界の10億人が飢餓の状態から抜け出せず、多くの

人々が貧困のうちにある。この現状を私たちは深刻に受け止め、アジア、アフリカの貧しい人々とどう共に生きることが出来るかの願いをもって、この学校があるということをもっと前提にしてお話しをさせていただきたいと願っている。

「約10人の外国人が滞在」

昨年3月11日の東日本大震災の日は、アジア・アフリカなどからの学生を迎える直前のことだ。ドイツ、アメリカ、日本のボランティア約10人が、私たちの働きを側面からサポートするために寮に滞在していた。地震による建物被害は私たちの思いを超えていた。もともとアジア学院の建物は古く、地盤の弱さも手伝って被害を大きくした。

「大丈夫ですか？」と宣教師

このような中で、アメリカの合同メソジスト教会から派遣されていたジョナサン宣教師が、地震直後近くの家々をまわって「大丈夫ですか？」と、声掛けをしてくれた。あの震災を受けたときには自分たちのことを考えるだけで精一杯だった時でもジョナサン宣教師が近所を回り、声掛けをしてくれたことに感謝している。

アジア学院にも福島から放射能被害で避難して来た人がいた。栃木県那須塩原市にも福島原発事故によって被災した人々が避難して来た。市は当初、避難者に建物だけを提供し、食事などは自分たちでやれという方針だった。私たちアジア学院も被災していたが、収穫した農作物や卵をこの人たちに提供した。少しでも自分たちのできることをしたいという職員の思いがあった。

「この状況の中でも礼拝を」

3月13日は日曜日だった。スタッフの中から「このような状況の中でも礼拝を守ろう」と、言う声が挙がった。その声に促されてみんなで聖書を読み、祈りをした。この時私の頭に浮かんだ聖句は、第一コリント10章13節だった。「あなた方を襲った試練で、人間として耐えられないようなものはなかったはず。神は真実な方です。あなた方を耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道も備えて下さいます」。自分の祈りにも似た言葉だった。このまま行けば、「アジア学院は継続できなくなるのではないか」、あの時は真剣に思った。スタッフの中から「こんな所にはいられない」、「逃げましょう」と言われると、アジア学院のある西那須野から出ていったら「この働きはどうなるのか」、「あとの学校の責任は誰が負うのか」等々。いろいろなことを考えると行き詰まる思いがした。責任あるものとしては、「何故このときに、ここに僕が？」と考えた。

「ヨブの思いが少し分かった」

旧約聖書ヨブ記のヨブは、神に「なぜ」と問うたが、この時ヨブの思いが少し分かった。率直に言って「私はなぜこの時に校長であったのか」と心の中で弱音を吐いた。「俺についてこい」と言えたら格好いいのだが、「なぜ、この時に校長の役割を担わされているのか」と思った。

「前理事長の突然の死」

ついこの間までアジア学院の理事長は丹羽章（にわ・あきら）氏だった。今年6月

25日に76歳で突然天に召された。丹羽前理事長は日本キリスト教会栃木教会の会員で、社会福祉法人一麦会理事長でもあった。獨協医科大学名誉教授でもあり、北海道家庭学校(遠軽町)創設者留岡幸助の孫に当たる人。大震災翌日の12日には学院に駆けつけ、その時からアジア学院の震災復興に共に取り組んで下さった。普通、理事長は名誉職みたいなどころがあるが、丹羽氏は共に歩む理事長であった。人が困難な時に置かれたり、いろいろな苦しみの中にあったりしたときに、「共に歩む者」でありたいといつも考えていた。その丹羽理事長が突然、天に召された。私はアジア学院震災復興の心労が重なったのだと思っている。亡くなられた3日後には理事長選出の理事会が予定されており、あと3年間是一緒にやろうと言って下さった矢先のことだった。

「心が揺り動かされた苦難」

きょう、掲げさせていただいた「苦難と希望」の苦難の中には、大震災における私たちが受けた被災という苦難とそれから放射能被害によって本当に私たちの心が揺り動かされた苦難が含まれている。あの時の気持ちは何とも言えないものだった。放射能に向き合い、私たちの解決の道が見えないような議論、神経がびりびりするような、そういう議論をしてきたあの時の苦痛に満ちた思いと、その中でやっと方向が見えてきたと思ったときに丹羽理事長が天に召された。このような苦難はいつまで続くのか。

「降り注いだ放射能の雨」

アジア学院は、福島第一原発から110^{km}離れているが、3月15日、風が南風に

変わった時、福島第一原発から放出された放射能が風に乗って那須、那須塩原市、それから日光へと流され、そしてそのときに降った雨によって私たちの所に降り注いだ。アジア学院は、放射能汚染に関して信号でいえば赤でもなく青でもなく、黄色の所にいる。ホットスポットは、那須塩原市にもある。地震によって受けた被害よりも放射能被害による影響の方が私たちの心の中に与えた衝撃は大きいものがあった。今でもそれは続いている。

「農村伝道神学校に一時避難要請」

放射能被害によって農村伝道神学校に一時避難させてもらえるどうか聞いてみよう、ということになった。アジア学院は40年前、農村伝道神学校から出て、現在地(西那須野)にアジア学院を創設した。農村伝道神学校でもすぐに理事会を開いて下さって私たちの一時避難を受け入れると言ってくれた。このことも神のお働きだと考えている。私たちは、教会からサポートいただいているが、教会にお返しするということは余りしていない。もし私たちが教会にお返しすることが出来るとしたら、農の視点をもった伝道者の育成に何らかの形で関わることではないかと考えている。今日アジア学院にはアジア、アフリカなどの貧しい農村で働く牧師も学んでいる。多様な交流を通して学びの場が広がることを願っている。そういう形で私たちの学校が用いられたらと願っている。

「忘れられない教区関係者の初訪問」

震災後忘れられないのは3月25日、当時関東教区議長の疋田國麿呂先生が教区の

三役や常置委員の方々と共にアジア学院を訪問して下さったことだった。これは教会関係者としての初めての公式訪問だった。地震後私たちが困惑しているときにお出で下さって、疋田先生は「アジア学院を他の被災教会とは区別しない」と言われた。すごく大きな言葉だった。先生は、他の教会と同じようにアジア学院を教区としては支援すると、言って下さった。これが、寄り添うということだと思った。途方にくれていたときにあの疋田先生の言葉がどれほど大きな励ましになったか。どれだけ力強いものであったかはその時、その場所に立ってみないと分からない。私たちは大きな励ましを受けた。

「関東教区が継続的サポートを約束」

亡くなった丹羽理事長が私たちに寄り添って、アジア学院復興のために働いて下さったことを、先ほど申し上げた。そしてアジア学院にとって疋田先生の言葉は大きな励ましだった。その後も関東教区は教区として継続的なサポートをしてくれている。特に私たちは栃木地区にいるが、栃木地区の諸教会の皆さんが入れ替わり立ち替わり訪ねて下さり、折に触れ私たちのことを覚え、祈り、サポートして下さっていることを強く感じている。

また疋田先生は、後日大宮教会の会員で一級建築士の松下設計事務所代表の松下充孝さん（埼玉地区壮年部委員長）を派遣するといわれた。数日後、松下さんにアジア学院の被災建物の診断をしてもらった。幾つかの建物は危険だから建て替えの必要があるとの指摘を受け、再建のための道筋についても指導していただいた。松下さんの

意見を参考に理事会で協議、建物の被害総額を5億3千万円とすることを確認した。

「どうすることも出来ない数字」

私は被害総額5億3千万円という数字を聞いたとき、アジア学院ではどうすることも出来ない数字だと思った。被災建物の建て替えの必要性が言われる中で、本当はどうしたものかと思った。その時にも丹羽理事長は私に、「大津先生、この働きが神様の御心ならば必ず出来る」と言われた。

「そうだ。任せよう」

この言葉が何か見通しが見えていたときに言われた言葉ではなく、見通しの見えない暗闇の中に置かれていた時に言われた言葉だった。どうしたらいいか分からなかった私に、この言葉を聞いた私は、「そうだ。任せよう」と思った。今から考えるとアジア学院再建のために理事会で5億3千万円必要だと考えたとき、私たちは、公的支援によって半分近くもらえるものと考え、何か光が見えてきたように思えた。また、その時日本基督教団には関東教区を通して1億円の支援をお願いしたいと考えていた。それに震災復興の募金を合算すれば何とかかなりそうだという単純な考えだった。現実を受けた公的支援は1,400万円、教団からいただいたのはチャペル建設資金として2千万円。残りは募金で賄わなければならなくなった。これが私たちが置かれた現実だった。この現実直面して私たちは再び暗闇の中に閉じ込められた思いになった。

「被災総額を満たす募金を実現」

アジア学院の現在の状況を上げると、

国内の教会・団体・支援者からの募金と海外の教会から頂いた募金**及び募金の約束**を合わせて、被災総額を**ほぼ**満たす募金を頂いている。丹羽前理事長がいみじくも言われたように「神様の御心なら成る」と言われたことが実は今、成っていると考えている。それは私たちが当初立てた計画とは違っていた。今回アジア学院に頂いた支援は、まだアジア学院には役割がある。「頑張れ」というエールを送られているように思えた。海外の教会からも代表が訪ねて下さり、アジア学院を「サポートする」と言われた。プロテスタント教会もカトリック教会でもある。農村伝道神学校で農村指導者研修を続けてしていたときもわざわざ訪ねて下さった。

「アジア学院卒業生からも支援募金」

また各国のアジア学院卒業生は、募金を集めて送ってくれた。またミャンマーの村では、アジア学院震災復興のために、村人たちが集って祈祷会をしてくれた。私たちは改めて教会の大きな支えと祈りを感じた。国内の個人・団体・教会、また海外の個人・教会からのサポートは大きな力となった。

「9月23日に奉献式」

お陰で被災した建物の全面的な建て替えによる新校舎が那須の大地に既に完成、9月23日に奉献式を行うことができた。被災してから1年半、超スピードによる復興が進んだ。神様の大いなる力が働いたとしか思えないうれしい出来事だった。

「放射能汚染による被害」

最後に福島第一原発事故による放射能汚

染について少し申し上げたい。3月15日の水素爆発の時に南風とともに雨が降って私たちの所にも放射能汚染がもたらされた。アジア学院のある那須塩原市の放射能線量は毎日市役所からインターネットを通して送られてくる情報によって、また私たちの独自の計測によって大体の様子は分かる。

「農作物への放射能汚染」

今も放射能が土壌に蓄積されている。現在ヨウ素は短い半減期のため検出されていないが、セシウムはまだ残っている。いまだに私たちの農作物にも放射能の影響が出ている。それは私たちだけではなくて、栃木県では那須町、那須塩原市、隣の大田原市、日光市にまたがって被害が出ている。当初私たちは放射能に関する知識も乏しく、何をもって安全なのかということ私たちがの中で議論せざるを得なかった。その後は放射能測定のため一定の場所を決め、データをとり冷静に対処している。

「食品放射線計測精密機器を入手」

その後日本キリスト教協議会（NCC）のエキュメニカル震災対策室からの寄贈を受けて、食品放射線計測精密機器（シンチレーション・スペクトロメーター）を使って米、野菜、豚肉、鶏肉などの放射線量を測定することができるようになった。またガイガーカウンターによって、町の人と共同で毎日それぞれ定点を決めて空気中の線量を測定。更に、NCCから寄贈頂いた精密機器を用いて、地域の市民のために一般向け食品放射能計測センター「アジア学院ベクレルセンター」を2012年1月から開設することが出来た。これは現在も市民

ボランティアの協力を得て継続している。

「ベラルーシ食品安全基準」

また私たちは、チェルノブイリ事故の経験を踏まえて出されたベラルーシの子どもへの食品安全基準を私たちの食品の安全基準の目安とすることにした。これによって食料品については37ベクレル以下のものを自給用及び販売用食料品として用いることにした。現在政府は100ベクレル以下のものを安全としている。

放射線量については2011年度のアジア学院の玄米が11ベクレル、白米は3ベクレルだった。2012年度では、今年秋に収穫した新米では玄米3・2ベクレル。白米が0・69ベクレル。野菜は総じて20ベクレル以下に。鶏肉は9ベクレル以下、卵は5ベクレル以下。豚肉は6・5ベクレル以下である。一方落ち葉は出来るだけ集めて処分する一方、薪ストーブを使っているが、残った灰の放射線量は高い。

「安全基準を今も超えるキノコ類」

椎茸を含むキノコ類の放射線量は昨年と同様安全基準を超え、食べないことにしている。問題は私たちが有機農業を大切にしている学校であり、人のいのちを支える安全な食糧の生産が第一と考えている。たとえ低線量であれ、放射能汚染された食糧を提供することについては消費者の厳しい目線がある。低放射線量による内部及び外部被曝が若い世代にどのような影響をもたらすかは、今後とも継続的なりサーチが必要。私たちは那須塩原市に対して、子どもたちの被曝量を測定するホールボディカウンターの購入を要請していたが、最近市議会はそのを買わないという議決をした。私た

ちはこれからも引き続き放射能汚染について関心を持ち続けたいと願う。

「遺伝子を傷つける放射能」

生命学者の柳澤桂子さんは、「放射能は人間の大切なメッセージを持っている遺伝子（DNA）を傷つける。放射能の存在は人類の存在と相容れない」と言っている。人間の基本的な遺伝子情報である遺伝子を傷つけることでどういうことが起きるのかは分からない。福島では子どもたちに甲状腺ガンの兆候があるという医学的データが出ていると聞いた。那須塩原市にいる子どもたちは雨とともに放射能が降り注いだ3月15日には、雨具なしで下校した。子どもたちにどういう影響が出るか心配だ。

「神の創造世界を守り育てる役割」

創世記の天地創造物語のなかで、神は天地創造の後、それをご覧になって「はなはだ良かった」と書かれている。ここでの創世記の記事は、私たちにとって大切なことを言っている。神は、私たち人間に神の創造世界を守り育てる役割を与えられた。自然と共生する、あらゆる被造物と共に生きていくという在り方が、神様がこの時代に私たちに言われていることだ。自然環境を破壊して放射能汚染によって人々に絶大な被害を与えている、私はそういう意味で原子力発電所は、事故が起こらなくてももともと原子力発電所から出てくる廃棄物、放射能汚染された核のゴミの問題がある。

「10万年かかる放射能ゴミの除染」

放射能汚染されたゴミの放射線量がなくなるのには10万年かかると言われている。

10万年もかかってゼロになる放射能を排出する原子力発電所を今の私たちの生活維持のために使うことが許されるのか。10万年かからないとゼロにならないものを私たちは次の世代に残して良いのか。今の生活を維持するために次の世代にこうした危険なものを残して良いのか。私はこれは神の御心に反する「罪的行為」と考える。

「循環型共生社会目指す」

私たちはあらゆる神の被造物と共生する、循環型の社会を目指す必要がある。アジア学院としてはアジア・アフリカの人たちと共にそのことについて一緒に考えていきたい。自分たちだけが化石燃料を使って良いとか、自分たちだけが十分な食糧を得れば良いとかではなくて、アジアやアフリカの人たちと共に分かち合い、共に生きていく在り方、そのことを考えていくことが大切なのではないか。

原発を輸出すると野田首相は言っている。経済界からも同じ声が聞こえてくる。既にインドネシアやベトナムに輸出の話が進んでいるという。これは日本国の倫理にかかわる問題である。日本人の倫理に関する問題だ。倫理に反することを私たちは許してはならない。このことを黙って見過ごすなら日本人の責任は問われていくと思う。

震災と放射能被害を通して、アジア学院のモットー「共に生きる」ことが問われた。その重さを考えている。アジア学院はアジア、アフリカなどの草の根農村指導者養成のために私たちはキリストの愛に支えられて歩みを続けている。神様のご用のために用いられることを願っている。2013年9月16日に私たちは創立40年を迎える。

40周年直前に震災と放射能汚染に遭った。いろいろ揺り動かされながら40周年を考える場所に立たされている。今までそんな余裕はなかったが40周年を機にアジア学院の役割をもう一度考えてアジア・アフリカ、世界の人たちと共に生きる世界をつくるために、私たちの役割を担いたい。

「公的支援受けないアジア学院」

小さな学校だが、40年間公的支援を受ず、寄付だけでここまで来た。これは神が与えて下さった奇蹟だと考えている。危機的状況の中で揺り動かされながらも大体の方向が見えてきた。ここまで神は私たちを導いてくださった。同じ神様の働きが、大きな被害を受けた東北の人たち、東北の教会にも起こると信じている。最後に私たちの経験の一端をお話する機会を与えて下さったことに感謝します。



新装なったコイノニア棟で外国人学生と語る大津校長

大津 健一先生プロフィール

同志社大大学院神学研究科、米国太平洋神学校修了。同志社卒業後、筑豊閉山炭鉱で開拓伝道。日本基督教団倉敷教会伝道師。アジアキリスト教協議会(CCA)「開発と奉仕」部門幹事としてシンガポールやタイで8年間働く。日本キリスト教協議会(NCC)総幹事などを経て2009年4月からアジア学院アジア農村指導者養成専門学校校長。2012年より理事長兼任。1943年大阪生まれ。69歳。



「アジア学院」とは

栃木県西那須野町（現那須塩原市）に「東南アジア農村指導者養成所」として1973年に開校。鶴川学院農村伝道神学校（東京都町田市）の東南アジア科を母胎として誕生した。東南アジア諸国で既に農村開発に携わっていたキリスト教会とキリスト教団体の要請に応

えて、欧米のキリスト教会と援助団体の支援を受けて途上国の草の根の農村開発に携わる指導者を養成する国際機関として位置付けている。開校以来、将来途上国で働くことを目指す日本人も「学生」として積極的に受け入れている。創立以来約40年間、主にアジア・アフリカ地域の草の根に働く農村・農業指導者の養成に貢献してきた。文部科学省など国や地方自治体からの公的資金の援助は受けず、教会や一般団体・支援者などからの寄付金で運営されている。一般的に「アジア学院」（アジア学院アジア農村指導者養成専門学校）という名称で呼ばれている。

アジア学院の使命はイエス・キリストの愛に基づき、個々人が自己の潜在能力を最大限に発揮できるような公正且つ平和で健全な環境を持つ世界を構築することにある。「共に生きる」をモットーに掲げて、インド、フィリピン、タイ、インドネシア、ネパール、ビルマ（ミャンマー）などのアジア諸国を初めとしてアフリカなどから、毎年30人前後の研修生を受け入れ、有機農法を中心とした農業技術や相互扶助システムを取り入れた共同体づくり、女性の社会参加を促すための女性リーダーの養成に力を注いできた。1976年以降、ガーナ、ナイジェリアなどアフリカ諸国からも研修生を受け入れ、2012年12月現在で世界の57カ国、1200人を超す卒業生が活躍している。研修期間は4月から12月までの8ヶ月間、農業実習と座学を中心の研修、そして東日本農村地域研修及び西日本研修旅行などを通して循環型の農業やコミュニティー作り、農村社会、農協などについて学ぶとともに、水俣や広島訪問を通して環境破壊や平和の問題などについても学んでいる。

広大なキャンパスには、管理棟・農偉業研修棟をはじめ、食堂兼ホールのあるコイノニア棟、図書室・会議室のある教室棟、女子寮、男子寮、水田、畑、豚舎、牛舎、鶏舎、養魚池、森林、バイオガス、クロレラ培養槽、職員住宅、サイロ、マナハウス（食品加工棟）などの施設が点在している。しかし、2011年3月11日の東日本大震災で大きな被害を受け、コイノニア棟は新たに建て替えた。

新装なったコイノニア棟（食堂、ホール）・教室棟

那須の台地に見事に蘇った。
目新しい木製のベランダに
冬の陽光がまぶしく差し込む
教室の黒板の文字は英語だ。





仲良くランチ、国際交流に花が咲く
英語と日本語のバイリンガル注意書き
老朽化した学生寮 自給野菜のランチメニュー
豚小屋と畑



洋書が圧倒的な図書室
来訪者のための売店
職員室に荒川 朋子副校長
管理棟・農業研修棟



開会礼拝 「つながってこそ、教会」

「園庭が地盤沈下、擁壁が崩壊、壁が内側に倒壊…」

「私はぶどうの木、あなた方はその枝である」

「被災からの再起はイエスにつながるということ」

「東日本大震災・関東教区内教会の連携、再構築へ」

講師；竜ヶ崎教会牧師(関東教区副議長) 飯塚 拓也先生

1年3カ月ほど前の2011年3月11日午後2時46分、地面が激しく揺れて、東日本大震災が発生した。私はその日は特に教区で出掛けることもなく竜ヶ崎にいた。

「園児が帰宅を始めた時間帯に」

子供たちが帰宅を始めている時間帯だった。約3分の2の子供たちは帰っていた。預かり保育で残っている子供たちとか、お迎えに来てそのまま園庭で遊んでいる子供がいる時間帯だった。最初は横揺れから始まった。いつか止むだろう、終わるだろうという感じだった。ただ、どんどん揺れが大きくなっていくし、なかなか収まらない揺れだった。今だ半分、半信半疑なところがあり、もっと激しい揺れが下からどんと来て壊れていくというイメージがあった。どうもそうではない。その時は子供たちと園庭の方に出て、そのうち止むだろうと思いつつ、子供たちをなだめていた状態だった。そしたら園舎全体がとても奇妙な音を立てて揺れだして木が折れる音とか、ガラ

スの割れる音がした。これが地震なのかと不思議な感じだった。それは今も続いている。しかし、徐々に被害が明らかになってきた。まず私は震源地はどこだろう、それが福島県沖らしい。そうするとその後、大津波が来て東北、奥羽にひどい被害があるというところから考えていった。果たして自分の所も含めて関東はどうなんだろうか。翌日12日には朝、竜ヶ崎を出発して車で日立まで北上して茨城地区内の教会を全部まわった。竜ヶ崎も驚くほどの被害があり、自分の所のことはあまり話さないようになってきたが、きょうは皆さんに具体的に知っていただいた方がいいかと思い、関東教区の中でこういう状況だということをお知らせしたいと思った次第だ。

「教会堂は無事、園舎、牧師館が」

私たちの場合は教会はほとんど被害はなかったが、牧師館の被害と何よりも最大なのは幼稚園の園舎だった。こちらにおられる松下 充孝さん(地区壮年部委員長・松

下設計代表取締役)が地震の後すぐに来て下さり、まず園舎を目視で診断してもらった。これは松下設計に全部お願いしないと太刀打ちできないということで、ご協力いただきながら再建に当たってきた。園庭が地盤沈下を起こして斜面の擁壁が壊れた。

「このままでは大変危険」

このままでは大変危険であるということと園庭に重機を入れて斜面の土を全部いったん削り取って擁壁を造り直すという工事になった。これは去年の9月から11月の段階だ。重機で鉄板を入れ、土留めにしてここの土を全部とって擁壁を造り直すということをした。道路側に擁壁が倒れ込んでいるので、これをやり直す必要があり、雨でも降ったら土砂崩れで二次災害を起こす危険性もあるということとこんな工事になった。また、幼稚園のホールの天井、壁、ホールと保育室の間の壁が内側に倒れてきた。これも危険な状態になったのでホールに全部足場を組んでやった。これは去年の8月だった。

「1枚の絵」

この工事が8月の23日に終わるのだが、その翌日の24日にまだ足場を壊さないで残した状態にして、この壁面に1枚の絵を飾った。高さ3メートル、幅5メートルの大きな1枚物のキャンバスの木地の絵だった。卒園生のお母さんである藤原 由美子さんという作家に地面からそびえ立つ幹の太い1本の木を描いていただき、そこにみんながアクリル絵の具で手形を押していく、そういう絵を壁面に飾った。これが8月の24日だった。

実はこの手形は前の年、2010年の10月20日に私どもの竜ヶ崎教会、竜ヶ崎幼稚園が創立80周年を迎えて、その記念事業としてワークショップを企画してみんなの手形を作ろうとして押したものだ。2010年の10月にみんなで手形を押してそれをいよいよ壁面に飾ろうと予定していた日が2011年の3月12日だった。いよいよ「あした飾るよ」という前日に地震が襲った。



卒園生含む701人の手形が押印された絵

これは油絵と同じ物なので額装は専門家でないと出来ないのだからキャンパス屋さんに来ていただくことになっていたが、そのキャンパス屋さんが実は福島県の業者だった。

「同じ被災者同士の不思議な交流」

地震後しばらくこの業者と連絡がつかなかったが、ようやく連絡がついたときにまず、おっしゃったのは「もう自分たちが被災をしてしまったので当分行くことが出来ないからどうか違う業者でやって下さい」ということだった。ところが私どものこの壁も被災をしてすぐに工事が出来なかった。松下設計に設計管理をお願いして打ち合わ

せをしながらこの壁を工事したのは2011年の8月。足場がまだ残っている段階でフナオカキャンパスさんに来ていただいて掲示したのが8月24日。これはとても不思議なことなのだが、フナオカキャンパスさんが被災された。私どもも被災した。被災者同士になった。被災者同士が最初の計画をあきらめないで時期がずれても良いから最後までこの計画を完成させよう、という強い気持ちでいることが出来たので予定よりもだいぶ遅れたが、しかし、予定通り8月24日にこの掲示をすることが出来た。

「象徴的な出来事」

この業者さん、とても感激して下さって福島県から社員4人全員連れてきて掲示された手形を見て、自分たちは地震でいったんは何も出来ないと思ったが、でも駄目じゃなかった。そうおっしゃった。とてもこれは印象的だったし、私どもが何を大事にするかということにおいても象徴的な出来事だと思った。

「実は私の娘が危篤状態で…」

もう一つはこの80周年に向かってみんなの手形を押そうということで卒園生に手紙を書いた。そうすると、一人の卒園生のお母さんから電話があつて「実は私の娘が危篤状態で筑波大学の病院の集中治療室（ICU）に入っている。何とかならないか」ということで、すぐに電話を切り、作家とも連絡を取り、キャンパスの切った生地を持って病院に駆けつけた。ICUに入ってそこで眠っている女の子の手形を採らせていただいた。その子は障害児で脳に管が入っていて、その管が悪さをして意識不

明の状態になっていた。その女の子の手形を採ってそれも1枚の絵の中に入っている。

「ここで暮らしていたという証」

その女の子は手形を押した翌日に神様の所に召された。この手形を8月24日に飾ってすぐに、そのお母さんに電話した。お母さんは飛んで来て下さって、この絵を見ながらしみじみと「私の娘はもうこの世にはいないけど、ここで暮らしていたという証があるんですね」、「ここに来れば会えるんですね」と、おっしゃった。これは教会ではなく、幼稚園の話だ。

「1枚の絵のつながり」

しかし、地方にある教会にとっては幼稚園と教会はやはり一体だ。幼稚園で行っていることは教会が受け止め、教会がしていることが幼稚園で受け止められて共に歩むそのような歩みを、伝道をしている。その意味ではこのようにして一つの絵がもたらしたたくさんの数々のつながり、卒園した子供たちのつながり、地震を超えて被災者同士のつながり、また、今は神様のところに帰ってしまったが、そのような命を超えたつながり、そういったものが、ここにはあると思っている。実はつながるということは、とても大切なことなのではないでしょうか。

「私と共にいなさい」

ヨハネによる福音書で「私はまことのぶどうの木、あなた方はその枝である」というお話がある。そこでイエス様は「私につながっていなさい」とおっしゃった。「私につながっていなさい」という「つながり」

の意味は、「私と共にいなさい」ということ。違う言い方をすれば、「イエス・キリストのうちになさい」という言葉だ。教会がいうつながりというのは単なる手と手のつながりではなくて「存在と存在のつながり」。「私は何者なのか」という自分自身の問いに関して「私は神様のうちにあるものだ」—これがつながり、聖書でいうつながりということである。

「あなたのつながる場所はここに」

私たちは誰と共にいるのだろうか。そこにおいてイエス様は「あなたは私と共にいなさい」といって、十字架に架かって下さった。だから私たちはそのようにして「イエス様の中にいる」ということで神様とつながるのだ。次に、神様とつながるということを知ったものはまだ神様とつながっていない人たちに神様へのつながりへと導く、その業が委ねられているのだと思う。私たちは今、この時代にあって自分の居場所を失っている人たち、私は誰とつながったら良いのだろうかということで、苦しんでいる多くの悲鳴を上げている人たちに教会は「あなたのつながる場所はここにあるよ」、「あなたの場所はここなんだよ」という形でイエス様を指し示していくのではないのでしょうか。私たちはそんな形でつながりを大事にしようと、考えている。

「教会と教会のつながり」

最後にこのような東日本大震災の被災の中で実は今、関東教区が教会と教会のつながりも再び築き上げようとしている。今皆さんに見ていただいている写真は日本基督教団水戸自由が丘教会の建物だ。水戸市に

あるとっても小さい教会。この建物も地震によって被害を受けた。屋根瓦が大きく破損、タイルにもかなり亀裂が入った。

「新しい案内看板」

この建物も松下さんのご協力によって改修工事が行われた。改修後、こんな素敵な建物に直った。この教会の会堂の脇には新しく案内看板が作られた。ここに御言葉が書かれている。「私はぶどうの木、あなた方はその枝である」。これもいみじくも象徴的だ。誰もこういうことを打ち合わせしていないが、被災復興していく中で、そこで出来上がってくるもの一つ一つがやはりシンボルとなっていく。今、私が話した竜ヶ崎幼稚園のつながるといふこと。それが水戸自由が丘教会においても同じ御言葉で復興からも立ち上がりがあった。このようにしてこの東日本大震災を通して今再び教会を超えて教会と教会が手を結んでつながって、多くの人々を招き入れていこうとしている。

「主にあって一つ」

東日本大震災は本当に起きてほしくなかった。でも、このように起きてしまった地震の中から私たちはもう一度そこから立ち上がっていくその時に、イエス様とつながっていこう。イエス様と共に歩もう。そのような強い確かな足取りをそこから踏み出していきたいと思っている。皆さんとお会いできたことを本当に感謝している。今日一日を通して本当に「主にあって一つ」ということを皆さんと共に出来ればと思う。祈りましょう。

神様、この時を感謝します。神様が与え

て下さった出会いが私たちの中で実って祈りを共にし、思いを共にしつつ、共に苦しみ、共に喜ぶ主の身体となっていくことが出来ますように、私たちは苦しみや悲しみを超えてそこで駄目にならないでそこからまた新たなものをつくり出す力を与えていただいています。それは神様が与えてくださった力です。その力をみんなで祈りながら寄せ合って素晴らしい証の業をすることが出来ますように、今苦しみの中にある被災教会、被災地、被災された方々に神様の平和がありますように。感謝してこのお祈りをイエス様の御名によって御前におさげ致します。アーメン。

飯塚 拓哉牧師プロフィール

1957年5月30日、福島県会津田島町に農村の開拓伝道の家庭に生まれる。

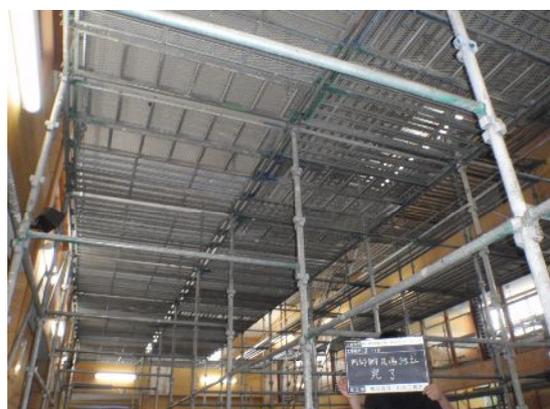
1983年3月農村伝道神学校卒業し、翌月4月から竜ヶ崎教会に赴任。

竜ヶ崎教会牧師・竜ヶ崎幼稚園園長に就任し現在に至る。2013年4月より、30年目の歩みを始める。

関東教区では、教師部委員・宣教部委員を経て、教区書記を8年。現在は、関東教区副議長として6年奉仕。また、茨城県私立幼稚園連合会副会長・龍ヶ崎市私立幼稚園連合会長も務めている。



重機で擁壁の復元工事 上 →右



室内壁崩落で足場組んだ保育室

「今こそ、『つながり』の時」

—共に苦しみ、共に喜ぶ—

「被災教会見積り額約4億円」

「3教会は建て替えへ」

「支援希望額の半分は貸付の教団支援に戸惑い」

「信仰の祝福、成長は共につながるということ」

「今、再び東日本大震災に向き合う」

関東教区副議長・竜ヶ崎教会牧師 飯塚 拓也先生



「教区内での被災は24教会」

関東教区の被災状況について語りたい。関東教区では、何らかの被害があったと教区に報告のあった教会数は、現段階では栃木、茨城、群馬、埼玉の諸教会23教会。教会関係の幼児施設では11ある。この報告はさらに増えるだろうと思う。

先日、土浦教会からメールが届いて「私の所は大丈夫だと思っていたし、他を考えればこんなこと言えないと思っていたが、教区総会で私の報告を聞いて、やはりここで言わなければならないと気付いた」ということで、土浦教会はあらためて会堂を建てた設計のところ、今、精密な検査をしているそうだ。だからここでは24になると思う。減ることはないですね。被災教会の復興計画に基づく見積額は現時点では4億916万円。4億だ。新潟県中越地震の時、募金目標額は1億8千万円だった。

「支援希望額は2億5千万円」

今、この4億のうち支援希望額として教会から出ている金額は予測として最大で2億5千万円になるだろうと思う。水戸中央教会と宇都宮教会の2教会の建て替え、栃木県原市教会の会堂建築と同等の建築という3つの教会の大きな被害があり、大規模修繕、2千万円弱の修繕が一つある。

「幼児施設は2、500万円支援を」

関東教区内の幼児施設の被災状況は11の幼稚園の中で建物等の被害、復興再建計画額は2億5千万円。これには建物が老朽化して耐震構造を含めた建て直しをする幼稚園が一つ含まれている。そこから出ている支援希望額は実はその約1割、2564万円が建物被害を受けた幼稚園から「何とか支援してもらえないだろうか」といわれている金額だ。1割ということだから何と

かこれを満たしたいと考えている。

栃木県にあるアジア学院は大変甚大な被害を受けた。復興再建計画案では5億3千万円。そのうちの3、500万円を教団に支援してほしいと希望している。本当にアジア学院はとても大切な学校だから日本基督教団はもっとアジア学院を支援していただきたいと私たち関東教区は思っている。

「那須の地で再建目指すアジア学院」

アジア学院に関しては放射能被害の問題が教団の中で一時かなり議論となり、「アジア学院はあ的那須の地から出るべきだ」という意見もかなりあったが、しかし、アジア学院は那須の地で再建することを選び取り、しかしそれは緻密な放射能との戦いをし、教団、日本基督教協議会(NCC)への支援を受けてドイツ製の230万円もするような食品測定器を持ってきてそこで厳密なベラルーシ基準でやっている。それまでアジア学院とかかわりのなかった農家の方々がアジア学院を訪れるようになった。あ的那須の地での可能性を求めるようになさっておられる。

「放射能測定で地域と連携」

水の線量のNDというのは、検出限界以下だということで、そういう数値だということであった。アジア学院は地震よりもはるかに今、地域とのかかわりを非常に密になさって、那須の地における農業の可能性を今、プロジェクトでなさっておられる。アジア学院の取り組みが成果を得るならば実は那須だけではなくて東日本全体の放射能汚染に悩む農民にとっても非常に大きな光になるものだろうと思っている。ぜひこ

の機会にアジア学院のことを皆さんに知っていただきたいなあと、祈っていただきたいなあと思っている。

「6幼稚園で14人退園」

関東教区の幼児施設の被災状況に関して戻るが、放射能被害が出ている。6つの幼稚園で14人の退園者があった。これはお母さんの実家に親子で戻るという形になった。14人で合わせて276万円のいわゆる幼児納付金の減が起きている。これは単年度であって、私どものところでも3人退園があって3年保育の子が辞めるということは3年分の保育料収入がなくなるわけだ。

「教会幼稚園が被災で経営危機」

単年度だけでも276万円の収入源が起きるといことは、今園児募集、園児減で苦しむ教会幼稚園にとっては経営的には少なからぬ打撃になる。放射能被害としては除染に取り組むということがあった。

「除染費用は自己負担」

幼稚園の園庭などの除染工事、これが9つの幼稚園で行われ、その除染費用が1913万円だった。この中で西那須野幼稚園の費用が突出している。しかし、この西那須野幼稚園に関しては行政補助がかなり入ったので、それも入れると補助が1444万円。差し引きで470万円がまだ公的な除染に補助が受けられず、除染費用が自己負担になっている。

「保育料減免額525万円」

被災児の受け入れ、これはこの埼玉にもあるが、福島から避難をされてきた方々の

子どもをお預かりするという取り組みで14の幼稚園で行われている。その受け入れに当たっては被災者でいらっしゃるのので通常の保育料を徴収することができないということで減免をしているわけで、その減免額が今分かっている段階で524万円。埼玉県はこの受け入れの補助金のある県だが、県によってはこれも違い、全く補助金のないところもある。自己負担額が437万円という金額になっている。

「私の幼稚園被害約4、600万円」

私の幼稚園は建物の被害、放射能の被害、退園者、放射能被害、除染、被災児受け入れと全部ある。建物被害は実は設計管理も入れると4、592万円。それに対する補助は厚生労働省と文部科学省がそれぞれ別で、合わせて2、687万円というもので、補助率が58・5%。この残りが自己負担になる。保育園分の1、400万円はいまだまだきていない。厚労省の手続きが遅れていて補助金がまだいただけない。ただ業者にはお払いしないわけにはいかないから今、手持ちの資金をやりくりして先々週に全部終わらせたところだ。

「保育料150万円のマイナス」

放射能被害は退園者が3人いたのでこれで94万円だ。二人が年中、一人が年少だったのでそれをざっと足していくと実は3人が卒園するまでいたならばという前提だが150万円くらいのマイナスになる。放射能被害は実は竜ヶ崎はホットスポットの一つで、やはり除染をしないわけにはいかない。一度業者を入れて行った。これで233万円かかった。これに対する補助は4

4万円で、189万円が自己負担ということだった。

「教会幼稚園の使命」

被災児一人を福島県から受け入れている。この方はお父さんとお母さんの住民票は南相馬と福島とばらばらで、お父さんのほうに子どもの戸籍があるので福島の方は自主避難になってしまう。避難してもこの子は被災者の補助を受けられないケースだ。年中さんで、竜ヶ崎に避難してきた1年間はずっと親子で過ごしていた。民間のNPOが見かねて、せめて小学校に入る前1年は集団生活を送らなければならないということで相談があったものだから即受け入れを決定してこの方には保育料をいただくことができないので園がすべて負担をしている。これもキリスト教の教会幼稚園の使命ならではと思っている。

「一人では頑張り切れない」

びっくりされると思うが、関東教区ではこういう悩みが存在しているのだ。そのことをぜひ覚えていてほしいし、一人では頑張り切れないところもあり、幼稚園・保育園に関して一言言えば、子どもがいるので、「お金がないからできません」というのは通らないのだ。教会は祈りながらみんな頑張っていこうという教会のペースを大事にしたいが、幼稚園・保育園は地域の信頼を考えると、お金がなくともやるしかない。そうしたこともお含み願いたい。すいません。重たい話で。ごめんなさい。

「信徒宅のお見舞いも」

関東教区では信徒宅のお見舞いもしてい

る。信徒宅にも建物被害があったので全壊10万円、半壊5万円、一部損壊3万円というかたちでお見舞いを差し上げた。もし、埼玉でも罹災証明がある被害に関してはまだお見舞いをするので皆様の教会の関係の方でおられるならおっしゃっていただきたいと思う。このようにして関東教区に寄せられた募金を、募金してくださった皆さんの思いを良く受け止めて用いるようにさせていただいている。

「関東教区に悩み」

今、関東教区に悩みがある。教団の10億円募金のことだ。教団が決めた再建資金に関する配分方式によると、各教会が必要としている支援額の2分の1を支援し、あとの2分の1は貸し付けるというものだ。これには困ってしまった。中越地震の時にはまず、被災教会がどのくらい自分のところで献金できるかを考えていただいた。自分たちで精一杯捧げてもらって足りないところを支援しようということで、募集を進めたのが中越地震だ。大体の割合で言うと、4分の1、25%くらいを自分たちで献金をして75%が募金だった。25%の自己資金の中には教会員が少ないので教区からお金を借りて今も教区に返済している教会がある。それが私たちとしてはすっきりしたやり方だと思っている。

「それでは困る」

教団は教区が認めた支援額の半分を支援、半分を貸し付けるということになった。当然のことながら半分は返さなければならぬ。それでは困る。今繰り返し教団にお願いしている。そういうことが今起きている。

「10億募金の半分が会堂再建」

大体今、奥羽も東北も会堂の再建額がはっきりしてきて支援としてこのくらい必要だと分かってきた。それが当初考えていたよりも多くない。関東教区が2億5千万、おそらく東北教区も同じくらい。多分奥羽は1億強だろう。10億募金のうちの5億円が会堂の再建だった。それにもう少し頑張れば支援希望額に全部対応できるじゃないかということが分かってきた。

「半額返済はナンセンス」

支援希望額の半分を支援して、半分は貸し出す。これは上記の事情からしてナンセンスだし、特に関東教区はこれは非常に困る。例えば、教区には直接外部からの献金がある。海外からも。マスコミ報道の影響もある。そうすると教区で教区に来たお見舞金を持っているので、教団が支援希望額の半分を出すのであれば、残りの半分は教区が出しますよと言えるのだ。ところが関東教区はどうでしょうか。そういった意味では一番献金がきていない。関東教区の諸教会は既に教団の10億円募金にもう2千万円以上献金している。中越沖地震を体験した教区だからそういう痛みには敏感であるという良さがある。そうすると関東教区はどうなるか。

「借りに不公平なくせ」

10億募金に一生懸命献金をしてそっちに協力をしながら被災教会の2分の1の貸し付けに関して教区が連帯責任を負う。こういうことが今起きているものだからこれは困りますよと、少なくとも被災した奥羽、東北、関東の3教区の被災地教会がこの借

り入れに関して不公平が起きないように一生懸命今お願いしている。この点に関しては今だすっきりしていない。

この前の教区総会で関東教区として募金目標額を定めるべきだという意見もあったが、そこに至らなかった。というのは関東教区としては教団の支援募金に一本化したのだが、その結果、借入れは教区が責任持ちなさいとなった時には教区にそのお金はないから、もし本当にそうってしまった時は教区としてその資金を確保しなければならなくなってしまう。

「希望額の7、8割の支援を」

今の段階では兎にも角にも10億円募金が目標に達しないと、その次の話が生まれないのも事実。教区としては10億円募金の献金を引き続きお願いをしている。そのようにして関東教区は教団募金に協力しながら、しかし、関東教区の置かれた状況を教団にご理解いただいて、支援希望額の半額の貸し付けに関しては教区が連帯責任をもって教会と返しなさいを、何とか止めて下さい。むしろそれだったら教会が献金できる精一杯お捧げするからどうか支援希望額の70%、80%支援して下さい。これをしようとしているところだ。

「つながりをつなげる」

これからまとめに入る。きょうの講演のテーマは「つながりをつなげる」。「共に苦しみ、共に喜ぶ」ということ。2004年7月13日、新潟水害があった。見附教会が床上浸水の被害を受け、信徒宅にも被害があった。栃尾教会の信徒宅にも被害があった。三条教会にボランティアセンターが

設置され、新潟地区がその運営に当たってくれた。このとき大宮教会の疋田 国麿呂先生が宣教部委員長。私と疋田先生は13日の夜に新潟に入って14日に見附に参った。そこからすぐ教団に電話をして社会委員会で募金をして下さいと、お願いした。

「自然災害の皮切り」

考えてみると2004年7月13日の新潟水害がその後引き続き起きる関東教区の体験する自然災害の皮切りであった。残念な事に。同じ2004年10月23日、新潟県中越地震が発生した。十日町教会、小出教会、見附教会、栃尾教会、長岡教会に被害があった。信徒宅に被害があった。その後2年間続いた豪雪があった。このときに教団で1億5千万円募金、後に3千万目標を上げていただいて1億8千万円募金をした。

「総会決議」

関東教区は1億5千万円の半分の7、500万円を関東教区の責任において集めるという総会決議をし、一丸となって取り組んだ。この中越地震のそれ以降は、当時の埼玉和光教会の三浦修先生が議長であり、その後大宮教会の疋田先生が議長になって歩んできたそのような取り組みの時代だった。実は十日町教会にボランティアセンターが設置されたのは一つのエピソードがある。十日町教会の牧師の新井 純先生はその前の7月13日の新潟水害のとき、当然、これは大変なことになった。自分も何とかしたいと思っておられたが、保育園や様々なことがあり直接ボランティアセンターには関わらなかったそうだ。

「内心忸怩たるもの」

そのことでは内心忸怩たるものがあった。自分で胸を痛めておられた。まさかそのときには思いもしなかった10月23日の新潟県中越地震。このとき新井先生は決断をされた。今回は自分がしなければならぬ。十日町教会の皆さんも共に担って下さって十日町教会ボランティアセンターができたのだ。100%の断言はできないが、そのように考えると、新潟水害があって、新潟県中越地震があり、それがボランティアセンター設置につながっていったという一つの流れが実は見えてくる。また新潟県中越地方、豪雪地域だが、私は竜ヶ崎教会に1984年に参りましてずっと竜ヶ崎教会だ。教会を動いていない。ずっと関東教区だ。でも、冬の新潟には一度も行ったことがなかった。もしかしたら中越地震がなければ今も冬の中越は知らないかもしれない。2004年の1月に教団の方々をお連れして被災教会を周った。

「車がない」

雪の中をスタッドレスタイヤを履いて。ナビが誘導してくれないとどうにもならない。標識も見えない中で十日町の旅館に泊まって車を出そうと思ったら車がない。雪に埋もれて。車を出すのに30分かかった。あれは教団の方々に「いい機会になった」というと、現地の方には申し訳ないが、「雪との戦いとはこういうことなのか」ということを知った。

「目に見えない『線』」

豪雪に対しても「雪掘りボランティア」が入っているし、兵庫教区の長田センター

が雪掘りボランティアに兵庫から駆けつけて下さっている。そうなった時には阪神淡路大震災、新潟水害、新潟県中越地震、そして豪雪。ここに一つの目に見えない「線」がある。

2007年7月16日、新潟県中越沖地震が発生した。ちょうどこの大宮教会で宣教総合協議会の開会礼拝の最中だった。すぐにこの大宮教会の建物の中にある教区事務所でニュースを見て「これは大変だ」ということで、疋田先生が議長、私が副議長で、私が現地に手分けして行くことになった。柏崎伝道所に被害があった。柏崎伝道所にボランティアセンターが設置された。このボランティアセンターの特徴は、新潟地区の教師によって運営された。三条教会のボランティアセンターは新潟地区といっても、地区の有志の教師だった。十日町教会ボランティアセンターは新井先生が中心になってつくっていたものだ。しかし、新井先生には本当に大変な負担をさせた。

「牧師はセンターに入らないで」

その反省から柏崎伝道所にボランティアセンターを設置するときに牧師はボランティアセンターには入らないで下さい。新潟地区のみんなが交代でやる。こういう風にそこでも目には見えない進め方がある。2011年7月26日から30日、東日本大震災があった年の夏、新潟・福島豪雨がかった。この豪雨は新潟水害の時よりも降雨量は大きかった。私はたまたま息子の敬和学園の関係で新潟にいて帰ってこれなくなった。道路が通行止め、明け方ようやく竜ヶ崎にたどり着いた。

「関東教区の特徴」

小出在住の隠退教師宅が床上浸水した。見附教会の信徒宅の裏の崖が崩壊している。ここから私は関東教区はこのようにして「つながり」をつなげ続けた教区であり、これは関東教区の特徴だと思うのだ。そして東日本大震災に取り組むときにやはり私は「共に苦しみ、共に喜ぶ」というきょうの御言葉、一つの部分が苦しめば、他の部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれば、他の部分も共に喜ぶのだ。

「主に招かれた一つの身体」

あなた方は主に招かれた一つの身体だ。これを私ども関東教区は実はもう2004年の7月13日の段階から体験してきたのだ。それを今回もまた私は「つながりをまたつなげ続けていきたいなあ」と、そう思っている。最後にこれで終わりにしたい。

「片付けボランティア」

新潟県中越地震の被災支援の中でこんなことがあった。西山町。田中 角栄さんの地元、そこにお寺があってそこが被災してた。そこを訪ねた時、こう言われた。「教会さんはすごいですね。教会さんはお互い助け合って被災した教会を直していくんですよね。すごいですね。うちはぜんぜん、まだこれからです」とおっしゃった。柏崎市ある柏崎聖光キリスト教会、これはホーリネス教団だ。ここは礼拝堂が全壊してそこに私も片付けボランティアとして行った。

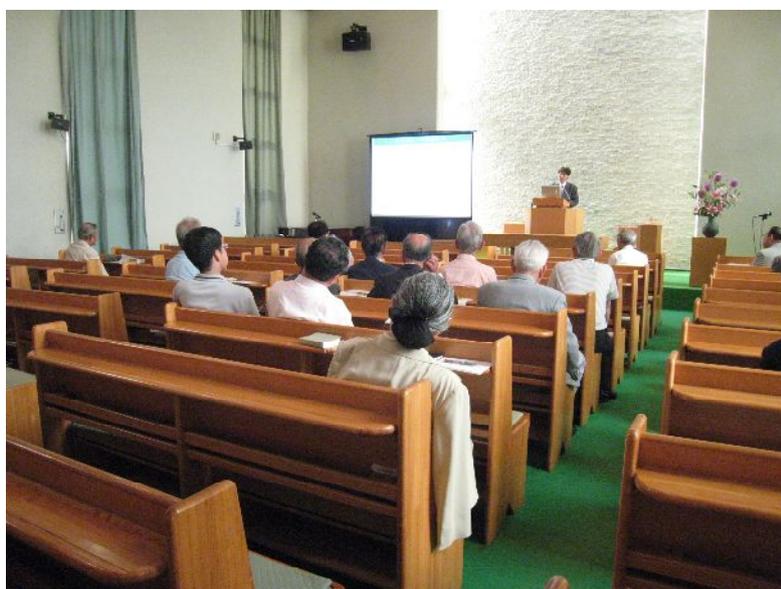
「底力の発揮しどころ」

その牧師も言った。「教団さんはすごい

ですね。地震があったとき、柏崎伝道所にみんなが集結してそこにボランティアセンターを立ち上げ、そこから出掛けて行く。それどころじゃない。自分のところにも教団がこうして助けに来てくれる教団さんはすごいですね」。私はこの東日本大震災にあたって今こそ私たち日本基督教団の連帯教会としての底力の発揮しどころではないかと思う。

「主の共同体の形成」

今、このときにこそ私たちは一つとなって本当の祈りに合わせて、力を合わせて互いに、共に 苦しみ、共に喜ぶ主の共同体をつくっていきたいと思うのだ。そのようにすることによって実は被災教会が助かるだけでなく共につながる私たちが信仰的に祝福され、私たちが成長するのだと思う。



埼玉地区壮年部講演会で飯塚牧師が熱弁

関東教区「東日本大震災」被災支援委員会

統括主任 飯塚拓也(教区副議長)作成

関東教区の被災状況

何らかの被害があったと教区に報告のあった教会数は、現時点では、茨城・栃木・群馬
埼玉の諸教会23教会。教会関係の幼児施設では11。被災教会の復旧計画に見積額は、
現時点では4億09,15万7,994円。支援希望額は、2億5,000万円(予測)

関東教区内幼児施設の被災状況

建物等の被害(支援希望に係る園)

復興再建計画額 2億50,15万7,994円

支援希望額合計 25,63万5,000円

アジア学院の被害

復興再建計画額 5億3,000万円。支援希望額 3,500万円。(教団に申請)

アジア学院の今後の再建計画

アジア学院 校長 大津健一

昨年3月11日の東日本大震災及び福島第一原発の放射能漏れ事故後、震災によって受けた建物被害に対する再建への取り組みと放射能被害に対する除染への取り組みを行っている。再建計画は、大きく3期に分け、第1期計画には応急補修工事や事務所及び職員室移転に伴う新築工事などが含まれている。現在第1期再建計画が完了し、第2期再建計画に沿った教室・新コイノニア棟の新築工事、農業研修設備整備工事などを行っている。教室・新コイノニア棟については今秋から使用の予定である。またこれに続いて男子寮新築工事、また危険のため使用禁止になっているチャペルの新築工事を行う予定である。特に新チャペルについては、関東教区の強いご支援の下教団から建築資金のサポートを頂くことが約束されている。第2期再建計画は、2013年3月末までに完了する予定である。更に第3期再建計画については、資金の見通しがつけば実施したいと願っている。

一方放射能被害については、水、土の線量や農作物・豚肉・鶏肉・卵などの線量を計測し、現在最も厳しい基準とされるベラルーシの子どもへの食品安全基準(水=10Bq/kg, 米=20Bq/kg, その他の食品=37Bq/kg以下)をアジア学院の自家消費用及び販売用の食料品に適用している。ちなみに水の線量はND、昨年度収穫の玄米が11Bq/kg, 白米が3Bq/kg, 野菜は0~21Bq/kg, 豚肉8Bq/kg, 鶏卵4Bq/kgとなっている。

但し、しいたけは415Bq/kg、ブルーベリーは123Bq/kgとなり、自家消費用・販売用にも供していない。また、本年1月より地域の市民向けに放射能計測サービス“ベクレルセンター”を開設し、市民の不安にこたえる活動を行っている。

以上のように私たちは、祈りと希望をもって現キャンパスにとどまり、2013年9月16日の創立記念日には、復興を感謝してアジア学院創立40周年記念の時を持つ予定である。

関東教区内幼児施設の被災状況

放射能被害（退園者）6幼稚園14人 2,76万1,800円の収入減（単年度で）

放射線被害（除染等）9幼稚園 除染費用19,13万1,815円

補助 14,43万6,547円

自己負担額 4,69万,268円

被災児受入れ 14幼稚園 減免額 5,23万6,750円

補助 86万6,500円

自己負担額 4,37万,250円

（例）竜ヶ崎幼稚園・竜ヶ崎保育園

・ 建物被害 45,91万6,115円

補助 保育園分14,10万1,000円 幼稚園分12,77万1,000円

計26,87万2,000円（率58.5%）

支援希望10,00万円 借入希望5,00万円

・ 放射能被害（退園者） 3名 94万3,500円

・ 放射能被害（除染等） 233万円 内、補助金44万円） 189万円

・ 被災児受入 1人 44万円

・ その他、被災児支援保育ボランティアを行った

関東教区の信徒宅のお見舞 信徒のお宅にも建物被害があり、お見舞を差し上げた。

り災証明を提出していただき、見舞い基準は：全壊15万円、大規模半壊10万円、半壊5万円、一部損壊3万円 とした。これによって、7教会・26名（全壊0、大規模半壊1、半壊4、一部損壊21、床上浸水0、床下浸水0）の方々にお見舞金を差し上げた。

茨城地区・水戸中央教会



あなたの重荷を主に委ねよ、主はあなたを支えられる

水戸中央教会牧師 山本 隆久

私たちの教会は礼拝堂、集会室、牧師館一体型の建物でした。半壊し、関東教区と相談した結果、取り壊して再建することになった。二次被害の危険がある牧師館と集会室部分は昨年7月に取り壊した。鉄骨のしっかりした建物だったので、半分壊すだけで800万円かかった。建物の残存部分に簡易補修をして、礼拝などの集会を今は守っている。牧師家族は隣の賃貸マンションに教区の支援で住んでいる。住宅は被災後3年以内に再建すると国の補助金があるので、間に合わせたいと考えている。

現在、敷地奥にある礼拝堂を、入りやすいように敷地前部に再建しようと決めた。以前から計画していた納骨堂は、水戸市の条例が改正され、今年7月からは近隣住民の承諾が不要となり、神に感謝している。信徒の住宅も被災している。

今春に入り、ようやく修復工事の順番が回ってきた状態。2010年にそれまでの積立金を全て使って大改修を行った後、被災したので、自己資金を増やすべく努めているところ。皆様のお祈りとご支援を感謝。

茨城地区・水戸自由ヶ丘教会



水戸自由ヶ丘教会牧師 西上 信義

2011年3月11日（金）東関東大震災によって、水戸の町はとても深く揺れた。古い建物が半壊し、屋根が崩れ、近代的なビルも内部が崩れた。私たちの水戸自由ヶ丘教会は礼拝堂と牧師館の屋根は「ぐし」が崩れそうになっていた。内外壁に亀裂が入った。下水施設も壊れていた。翌日、加藤地区長、現久保田地区長がお見舞い下さった。調査をして頂くと、礼拝堂の内壁にひびが入り、天井がひずみ、外壁が危険な状態だった。その日から、教区144の教会伝道所の祈りと励ましに深く支えられた。8月に入って、やっと、礼拝堂（18坪）と牧師館（10坪）の補修工事が地元の西山工務店によって始められた。教会員（9人）と教区関係者の方々の献金と教団共済組合のお見舞い金、関東教区と教団の方々の支援により、12月はじめに被災復興がなされた。小さな群れの教会だが、神さまの慰めと愛の聖霊が生きて働いて下さったと感謝している。2012年1月22日（日）午後4時被災復興礼拝には、教区と地区の教会伝道所の方々42名もおいで下さり、大きな祈りと賛美と励ましをいただいた。

「神さまは希望と愛の御国をくださいます。」

復興なった水戸自由ヶ丘教会は、水戸市内の50号線のバス停の前に立てられている。私たちの教会の使命は、主日礼拝を守り、相互牧会をしながら、「人間性の回復」の慰めの教会になること。一人一人が、新しい友に伝道する。そして、昼も夜も水戸の町の「福音の灯台」として、光をあらわしていきたいと祈る。どうぞ、慰めと喜びの教会へおいで下さい。

茨城地区・日立教会



日立教会牧師 島田 進

主の御名を賛美します。

東日本大震災の発生から1年2カ月、未だ多数の不明者がおられ、また生活の場を失われ苦渋と不便の生活を強いられている方々の大勢おられることを思いつつ、主のお支えと励ましをお祈りする。また、私たちの教会の被災を覚えて、今日まで多くのお祈りと数々のご支援を寄せて励ましていただき、心より嬉しく感謝申し上げます。

さて、震災当日、日立市は震度6強の強く長い揺れと海岸部は津波に襲われた。教会関係者には、人的被害、建物全壊という被害はなかったが、皆、家財・備品等の損壊があった。ここに、当教会建物・信徒宅等の被害とその復興状況を報告する。

(1) 教会建物、会堂(礼拝堂)・集会室(別館)・牧師館に、内外壁の亀裂や破損、天井板の歪み、トイレドアの歪み、蛍光灯・非常灯の器具の抜け落ち、その他で200万円程の修理費が見込まれているが、建物簡易診断調査では土台等にひび割れが見られない、軽傷とのこと。自分たちで修理するという事で、もっと被害の大きい教会・伝道所に支援費を回していただきたいと思う。今、壮年による「アカシヤ」グループが誕生し修理等に大活躍している。

(2) 教会員の住居には、全壊こそなかったが、宅地の陥没で建物の歪み、宅地の防護壁の崩れ、屋根瓦の崩落等で、半壊、一部損壊という診断を受けた方々が9世帯(17人)。その他に塀などの倒壊があり、数10万円～500万円をはるかに超える被災状況。他所に新築1世帯(3人)・賃貸集合住宅1世帯(3人)、他は現在地に我慢して滞留という現況。また、地震災害を機に転出された会員3人、地震災害とは言えないが2人が召天(4月と6月)され、以降、体調を崩す方々も見られる。

(3) その他、乳幼児、子ども、青年がいるので、放射線量が非常に気がかりだ。昨年6月中の牧師館玄関の測量器で常時0.218～0.160マイクロシーベルト/時を表示(日立の通常時は0.040マイクロシーベルト/時)。雨樋から雨水が落ちる場所で2.204マイクロシーベルト/時があった。現在は0.175～0.145マイクロシーベルト/時。できればもっと精密な線量計が欲しいが、今後も注視していく。子どもや若者の集まりでお茶や会食はペットボトルの飲料水を使用している。原発事故の本当の終息がいつかは不明だが、浄水器の設置も視野に入れなければならないのか？課題だ。

茨城地区・水海道教会



水海道教会の現状と課題



水海道教会牧師 加藤久幸

東日本大震災とその後の余震により、水海道教会は多数の亀裂とその他損傷があった。被災前から、中期的な課題として、教会は会堂のバリアフリー化を検討していたので、この工事を前倒しする方向で話し合いを始めた。紆余曲折があり、1年を経た2012年教会総会で「バリアフリー化改修工事と復旧工事を、教会員の合意を得て、速やかに実施する」と決めた。具体的には、新たに設置された会堂整備委員会が進めていくことになる。水海道教会学園（二葉幼稚園、育ちサポートセンター）では、塀の修理、園庭の除染作業、保育室の空調設備設置などを既に行った。

教会・学園は、被害状況の再調査も含め、今年度内に工事に着手できるように取り組む予定。皆さまのご支援とお祈りに感謝。私たちも、他の被災教会の歩みを覚えつつ、私たちの「整備・復興」を進めたいと願っている。

茨城地区・竜ヶ崎教会

竜ヶ崎教会竜ヶ崎幼稚園 竜ヶ崎保育園



竜ヶ崎教会 一歩ずつ歩んでいます

竜ヶ崎教会牧師 飯塚拓也

揺れが長く続いたことによって、建物や園庭の弱い部分に被害が出た。特に、関係施設の竜ヶ崎幼稚園と竜ヶ崎保育園に大きな建物被害が出、天井が痛み、壁が傾き、床が不陸し、デッキが破損した。また、園庭は地盤沈下と地割れ、コンクリートの擁壁に強い圧力がかかり破損した。昨年の夏休みより工事を開始。ホールと保育室全体に足場を組んで天井と壁を修理し、園庭には鉄板を打ち込んで土砂の流失を防ぎ、重機を入れて土を取り除いた。冬休みに職員室の床を張り替え、春休みにホールの床を張り替え、ようやく工事が終了。大工事となってしまう、資金的な問題も抱えながらの取り組みだが、一歩ずつ復興に取り組んでいます。牧師館は、屋根の破損、外壁・内壁の亀裂、扉のゆがみが生じ、こちらは業者の都合がつかず、まだこれからの状況です。幸い、会堂は無事だった。八角形の作りが地震のエネルギーを吸収したようだ。また、福島第1原発の事故にも悩んでいる。退園者・入園辞退者があった。園庭の除染を行ったが、近く2回目の除染を行う予定。

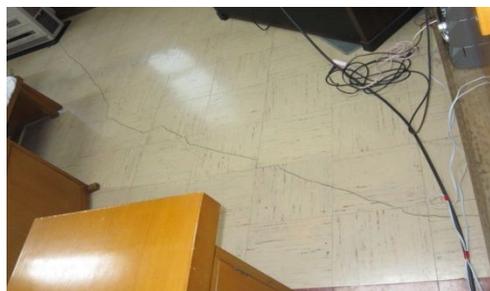
勝田教会、震災後の現状と課題

勝田教会牧師 鈴木 光

勝田教会は震災直後に被害状況を確認した所、壁の亀裂や棚などの用具が破損するなどの多数の細かい被害を見つけた。礼拝堂正面の壁の亀裂などは、早い段階で修理、逆に危険なく目立たない所、十字架塔につけられた避雷針が曲がってしまった状態なのは、見栄えの問題はあるが機能的な問題はないことからそのままに。いつか、と思いながらなかなか手をつけられない現状。

茨城北部としては、比較的小さな被害ですんだことを主に感謝。一年が過ぎて、あらためて見てみると附属の保育園施設などで、床や出入口の亀裂や段差が広がったり、排水口のマンホール部分が地面の変動で上にせり出したりと、時間が経過してから出て来た被害などが目につく。また、信徒宅でも複数、大小様々な被害が出た。祈りつつ、向き合っておられる。皆さんの支援とお祈りに感謝。続けてお祈りください。

茨城地区・下館教会



下館教会 いずみ幼稚園めぐみ保育園



茨城地区水戸教会



茨城地区・筑波学園教会



茨城地区牛久教会



栃木地区・宇都宮教会



宇都宮教会の近況報告

宇都宮教会牧師 木村太郎

東日本大震災による教会堂被災に際して、地震直後からお祈りいただき、またお見舞いや献金を通して、私共を覚えお支え下さったこと、あらためて深い感謝を申し上げます。

宇都宮教会は、この被災を通して、祈りつつ話し合いの時を重ね、昨年（2011年10月9日）開催された臨時総会で、新教会堂建築の決意をし、建築委員会を立ち上げた。以後、長老会、建築委員会を中心に、教会視察、設計者の選定、教会全体懇談会、そして資金計画についてのアンケート実施等を行ってきた。5月8日（火）には、第7回建築委員会が開催、5月下旬には、設計者から一番最初の設計図が示される予定となった。

新教会堂の着工時期等、具体的な日程については、まだ未定だが、少しずつ前進。さらに祈りを熱くし、主なる神さまが成し遂げてくださる業を信頼していきたいと思う。どうぞ今後ともご加禱のほど、よろしく

栃木地区・宇都宮上町教会



宇都宮上町教会

宇都宮上町教会信徒 國吉常喜與

十字架塔を支える4本の鉄骨のうち3本裂断、教会堂内は瓦礫の山、外側はブルーシートで仮雨除と満身創痍。3社5人の建築士が、「一日も早く新築を」と異口同音。復旧工事は3回に分け、3月に完了。教会と幼稚園で約600万円、会堂共済からの見舞金と自己資金で支払う。教区教団の多くの先生方からの指導と励ましに深く感謝。これからですが、まずは教団の「10億円献金への取組みだ。」「2年間、各年100万円以上」の目標を役員会で確認、一年目は約150万円を献金できた。二年目も同額かそれ以上を目標に祈りつつ取組む。今後の教会と幼稚園は、地域の福音の泉として、また有事の際の防災拠点となりうる教会新築のために祈りと具体的な準備に着手していく。ご加祷告支援をお願いしたい。

宇都宮上町教会みふみ幼稚園

みふみ幼稚園園長 國吉真理子

その時、園庭に避難した子供達と先生方は、教会十字架塔が大きく揺れるのを見ていた。もうひと揺れしたら折れると思ったそうだ。揺れが収まったあと、全員の無事を確認。感謝のお祈りを捧げた。その時にはまだ、東北の海と福島で大変な事態が起きているとは知らず、しかし早くも翌日には、数人の方が遠方へ転出された。それは確かな情報を得ての行動であり、その後も次々と在園児や入園予定児の家族が転出するなど、栃木県の安全安心のイメージは崩れ去った。栃木県内の有力企業はリスク分散のため海外生産にシフトし、宇都宮の勢いは失われた。これからの幼稚園は「その芯に何を持つか」が決定的に問われることになる。その時に、安心・安全な園舎は最低条件。幸い、教区・教団には現に幼児教育に携わり、経験豊かな先生方が多くおられ、信頼して前進できることは大いなる感謝。

栃木地区・四條町教会



四條町教会のこれから

四條町教会牧師 平山正道

東日本大震災の被害は会堂（今年で築100年）、付属館（フライ記念館、築7年）、幼稚園舎（築26年の鉄骨造りと築49年の木造）すべてに及んだ。改修工事は昨年秋、必要資金がすべて満たされて行なわれた。長年加入してきた日本基督教団会堂共済組合からの見舞金が、大きな助けとなった。幼稚園舎は被害が軽微、応急措置を済ませて保育活動には支障のないようになっているが、近い将来に大規模な改修か建て替えを行う計画。

会堂は古いので、数年ごとに手を入れて維持管理をしてきた。震災前の2年に限っても床の修繕、漆喰壁の塗り直し、木製の窓枠の取り換えなど、合計625万円かけて行った。もし、こうした改修をしていなければ、震災による被害はもっと大きかったかもしれない。歴史的建造物である会堂を大切に維持しながら、日常の伝道牧会活動を誠実に担い教会形成をしていくことが、わたしたちの教会の変わらない務め

栃木地区・益子教会



]益子教会の今

益子教会代務者 平山正道

東日本大震災によって益子教会の会堂（築17年）も大きな被害を受けたが、関係者のお祈りと関東教区の温かいご支援のもとで、改修工事を行うことができた（総工費437万円）。復興感謝礼拝を行ったのは12月11日、その翌週には、特別な1年を振り返りながら、感謝の内にクリスマス礼拝を捧げた。会堂は元通りに復興し、整えられた。問題はその後。8人の教会員のほとんどが高齢化し、礼拝への出席が困難。平均3～4人の礼拝を大切に守りながら、西上信義先生（協力牧師・水戸自由ヶ丘教会）を中心に、訪問伝道に力を入れている。またご承知のように、5月6日に発生した竜巻で、益子町は地域によって再び大きな被害を受けた。竜巻が通ったのは教会から西に直線距離で約2キロのところ。教会関係者や会堂に被害はなかったが、益子教会のことに合わせて、竜巻で被災した人々の上に、主の助けとお支えをお祈りいただければ幸い。

栃木地区・西那須野教会



西那須野教会 西那須野幼稚園



那須野教会の報告

西那須野教会牧師 菅野勝之

3月11日、西那須野教会はガシャガシャと激しい音をたてながら目の前で揺れた。あの音がまだ耳から離れない。堂の内壁は傾き、教会の塔の内側の壁に亀裂が入り、パイプオルガンのパイプはバラバラに倒れ、折れ曲がった。室の天井は落下し、什器、備品はひっくり返り、壊れて散乱した。この会堂が安全なのかどうかを確認することから、復旧に向けての歩みが始まった。3カ月後、会堂部分の修理が終了して、6月19日から、再び礼拝堂で主日礼拝ができるようになった。主の助けと、たくさんの方々の祈りと貴いご献金やお見舞いをいただき、励ましとお支えをいただいて、復旧できたことを心から感謝。今なお栃木県北地域は、放射線の心配がある。私共と深い関わりのあるアジア学院も大変な被害を受けた。西那須野幼稚園は放射線対策を続けている。引き続きお

栃木地区・鹿沼教会



群馬地区・桐生東部教会



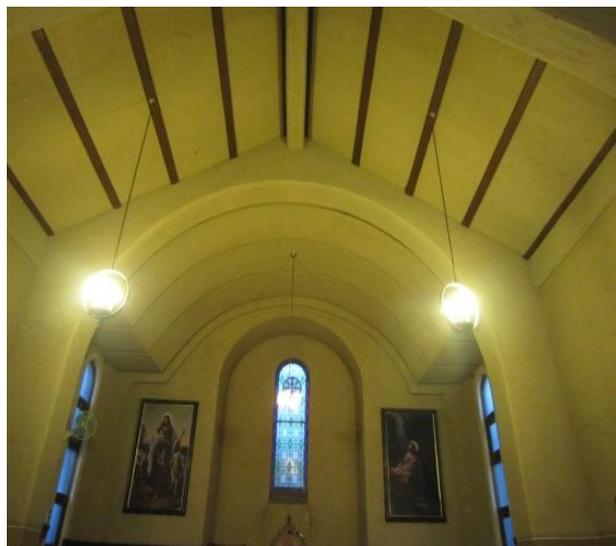
桐生東部教会牧師 小野團三

桐生東部教会では、2011年3月11日東日本大震災での被災以降、定期教会総会、その後、教会懇談会を3回開催、これからのこと、資金の手当て等を相談した。何とか今年の2月14日に教会の第Ⅰ期改修工事を始め、4月30日に完了、引渡しが行われた。牧師館の配水管の損傷に伴う3階と4階の改修工事、教会の本体の鉄筋4階建物と増築部分の鉄骨3階建てのつなぎ目部分および各階の壁等の修復作業は、予想よりも大きな改修工事となった。第Ⅱ期工事は、駐車場の陥没部分の全面的な修復作業が6月4日より21日までの予定で行われる。教団と関東教区のご理解とご支援、群馬地区、諸教会の仲間の皆さんより温かい励ましをいただき教会員一同、復興への希望と勇気を与えられた。3年後の創立100周年に向けて教の仲間は新しい気持ちで新年度の歩みを始めている。これまでのお祈りとお支えを感謝。心よりの感謝をもって皆様に御礼を申し上げる。

群馬地区・伊勢崎教会



群馬地区・原市教会



原市教会の近況報告



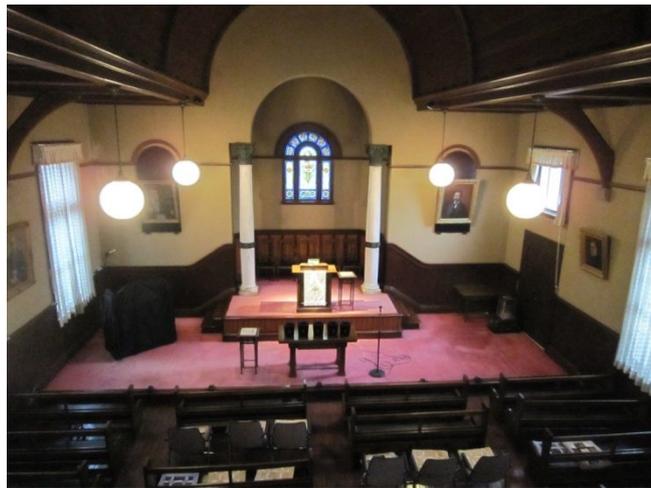
原市教会牧師 村田 元

このたびの東日本大震災で1952年に建設した礼拝堂が被災。皆さまが祈りに覚えてくださり、また、ご支援をも賜りましてありがとうございました。

礼拝堂は鉄筋コンクリート建築だが、経年による劣化部分の損傷と、30年近く前に増築した部分の破損がかなりあった。このまま使用することは危険ということで、皆で協議の結果、経年の補修部分を含めた全面改修工事に踏み切ることにした。このために昨年10月に臨時総会を開催、これからの経費は積立金や教会内募金で手当てすることになっている。

去る4月20日より工事に入り、6月29日に工事を完了する予定で現在工事中。工事の進捗に連れて次々と追加工事が出てきて、予算的には苦しい状況。幸い教会が設立した学校法人赤心幼稚園が併設されているので、礼拝、教会学校、諸集会は幼稚園を使わせていただいている。幼稚園は2010年建築で、同じ敷地内ではあるが、被災をまぬがれた。感謝してご報告する。

群馬地区・安中教会



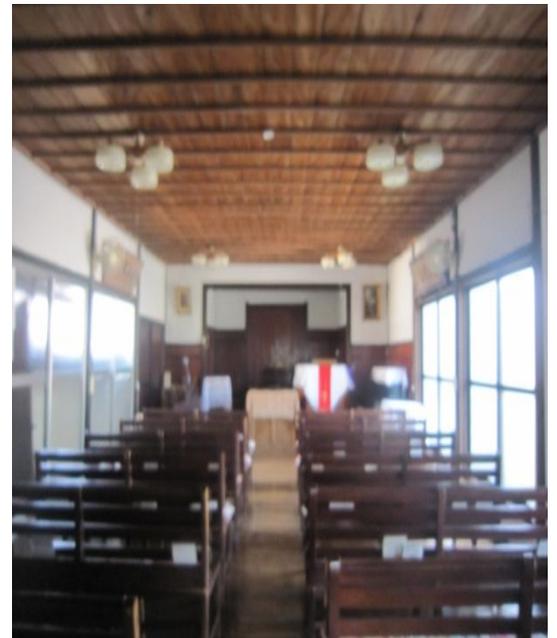
安中教会・現状と課題

安中教会牧師 江守秀夫

1918年築の現会堂は東日本大震災により内壁に剥がれと小亀裂等が生じ、昨年10～11月に全面を剥離して元の色合いに砂壁を塗り直すという修復をした。本来は京都の嵯峨野産のパウダー状のきめ細かな砂を素材にして塗られていたということだが、さすがに予算的にもそのような修理をする実力もなく近隣で入手可能な細かい砂を使って修復した。

又、外壁の大谷石に至っては「老朽化」と相まって震災が拍車をかけるように石積みに浸食だけではない「ゆがみ」を生みだし、それが雨漏りを誘発していることも事実。これらを全面的に修理するには新会堂建築並の経済的負担がのしかかるため実質的には不可能に近いというのが現状でしょうか。いずれにしても今後の課題としてこのハードの側面への早急な対応が迫られている事実には代わりが無く、課題の抜本的解決にはまだまだといったところ。

群馬地区・島村教会



島村教会の報告

島村教会牧師 佐藤謙吉

礼拝堂の壁のひび、保育園本館の壁や天井の変形、別館のサッシのしまりの悪さなど、振動による外壁のペンキの剥がれもひどく、補修の必要に迫れていたが、国の登録文化財に指定されているために、自主補修はできず、県、文化庁との協議が必要であったため、なかなか着工できないでいた。

この4月末日に文化庁の内定報が県にあったとの連絡を、伊勢崎市文化財保護課から受けて、5月の連休明けから補修工事がようやく始まった。

この工事に関しては、国、県、市からの補助はなく、教会の予算、保育園の予算などから支出する予定で、準備を進めている。総工事費は約400万円（土台などの取替が新たに必要となったため）。どうぞ、お祈りに覚えてください。

群馬地区・甘楽教会



甘楽教会、現在の状況

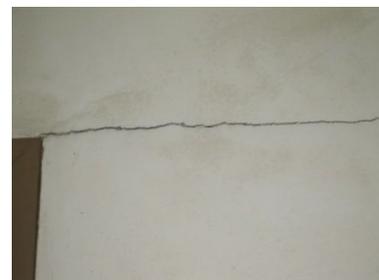


甘楽教会牧師 藤 秀彦

震災に傷んだ大谷石造りの教会堂は、簡易診断で補修の必要が指摘されていた。どの程度の修理を要するかを具体的に知るために、今年1月に精密診断を受けたところ、ひび割れた壁の修理をはじめとして、いくつかの修理が必要であることが判明。この精密診断の報告を受け、4月22日に行われた定期総会で、会堂修理に取りかかることを決議した。これから会堂修理のために動き出す。この修理のために祈りと力をあわせることができるよう、みんなで丁寧に議論しながら取り組んでいきたい。

教会と同じ敷地内にある幼稚園の園舎も、屋根瓦のずれなど修理が必要な箇所がある。耐震対策も同時に行わなくてはならない。群馬県は低線量ながら放射線の影響を受けており、敷地内の環境にも注意し続けている。教会堂の修理と幼稚園の活動が守られますようお祈り頂ければ幸いです。

群馬地区・泉町教会



泉町教会牧師 佐藤 泉

昨年の大地震でわずかながら影響があったらしく、教区より派遣された松下兄の簡易診断では、若干の被害との判定だった。教会堂の壁のひび割れや天井材の剥離など地震前より認められていたが、そのような箇所にあの大きな揺れによる被害の広がりがあるだろうとのお話だった。礼拝等を守るのに支障はないとのこと、その点では幸いだったが、放置してはいけないので、修繕を勧められた。

実は、地震が起きる前より整備事業を考えていたので、その整備計画の枠内で、地震の影響のことも少し意識しながら点検や修繕を進めていこうとしている。早急に修繕しなくてはならない程に悪い状況ではないと言われていたこともあり、整備はあまり進んでいないが、昨年は、天井材の剥離の点検と修繕を、ビル管理をお仕事にしている教会員数人の御奉仕により実施できた。時間のかかる高所での作業だったが、丁寧な点検・修繕を行ってもらい、感謝。

今後は壁や屋根の点検と修繕を実施したいと思っている。覚えて、お祈り頂ければ幸いです。

「つながり」をつなげる

ー共に苦しみ、共に喜ぶー

2004年7月13日「新潟水害」

見附教会が床上浸水の被害、見附教会信徒宅に被害、栃尾教会の信徒宅に被害
三条教会にボランティアセンター設置

2004年10月23日「新潟県中越地震」

十日町教会、小出教会、見附教会、栃尾教会、
長岡教会に被害

信徒宅に被害

十日町教会にボランティアセンター設置

*その後、2年続いた豪雪

2007年7月16日「新潟県中越沖地震」

柏崎伝道所に被害

柏崎伝道所にボランティアセンター設置

2011年7月30日～8月1日

「新潟・福島豪雨」

小出在住の隠退教師宅が床上浸水

見附教会信徒宅の裏の崖が崩壊

関東教区は、「つながり」をつなげ続けた教区であり、これは関東教区の特徴だと思う。

「一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶのです」

(コリントの信徒への手紙一 12章 26節)

「中越沖地震」被災支援の中で

西山町のお寺

教会さんはすごいですね

柏崎聖光キリスト教会

教団さんはすごいですね 今こそ、教団の全体教会としての底力の発揮どころ

「模範回答のない模範解答を求める哀しさ」

「自分の都合の良い神しか求めない哀しさ」

「神なしで私はないという神の再発見」

「遠藤 周作の聖書理解に救いの鍵」

「東日本大震災における一信徒の思い」

「あなたは東日本大震災をどう受け止めましたか」と、単刀直入に問われたら、「そのように受け止めました」と答えるしかない。「そのように受けとめました」とはどういう意味か。2011年3月11日（金）午後2時46分に宮城県・牡鹿半島の東南東沖約30^{km}の海底でマグニチュード9.0の東北地方太平洋沖地震が発生。宮城県栗原市では震度7という、気象用語で「激震」とよんだ震度の最高基準を記録した未曾有の大震災であり、さらに東京電力福島第一原発の放射能漏れ事故というダブルパンチで死者行方不明者が約2万人。避難転居者は34万人以上、全国にちりぢりバラバラになって移住を余儀なくされた、パレスチナのディアスポラ（離散）にも似た大惨事を引き起こした自然災害であり、人災も加わった歴史的出来事だったと、捉える。

「事実を事実として」

事実を事実としてありのままその通り受け止めたという素直な答え方しかできない。震災直後から「東日本大震災をどう受け止めたか」で、あらゆるマスコミや国民一人一人の間でいろいろなことが言われた。

東京都の当時の石原 慎太郎知事は「我欲に対する天罰だ。洗い流してもらいたい機会だ」と発言してひんしゅくを買った。「私たちが何か悪いことでもした罰ですか」と、素朴に自問自答した人々も多かったのではないか。それは自然な人間の発想とも取れるが、私はその考え方には違和感を覚える。

「バベルの塔」

原発という人間のコントロールが効かない神をないがしろにしたモンスターを創った「バベルの塔」の崩壊だという、新聞のコラムがあった。世の中に「悪がはびこった吹きだまり」を一掃するために起きた「ノアの箱船」と表現した言葉まで紙面に躍った記憶もある。それでは「ノアとは誰か」という野次馬的興味もあるが、それはさておいて。

「初任地仙台の友人家族の悲劇」

私は1971年3月に大学を卒業し、共同通信というマスコミで働く場が与えられ、1カ月間の研修のあと、5月6日の連休明けに赴任した初任地が仙台だった。宮城県庁のすぐ近くにあった聖学院と同じディサ

イプルス系の日本基督教団仙台外記丁教会、現在は仙台市の郊外に引っ越し、仙台川平教会という名称に変わっているが、そこで2年3カ月、七夕の翌日第二の赴任先の秋田に転勤するまでお世話になった。

「母親と孫2人を津波で失う」

そのころ、青年会で一緒に交わりのあったイニシャルTさんという当時は東北学院大学の学生だったと記憶しているが、その彼が、母親と孫の2人を津波によって亡くされたと聞いてショックだった。その友人夫婦は仙台市の中心街にいて無事だったが、彼らの家族は仙台市閑上という海岸近くに住んでいたと聞いた。昔、つき合っていた頃の彼は真面目で物静かな非常に目立たない人だった。その彼の家族が亡くなったと聞いたとき、彼らの家族の生き方に問題があり、その天罰だったとは到底あり得ないことだと確信している。平穩に、平凡に暮らしていたおびたしい数の善良な生き方をしていた人々が一瞬にしてかけがえのない命を奪われたことを「どう解釈すればいいか」と、問うても満足できる模範解答なんてないと思う。

「どう受け止めたか」

「どう受け止めたか」、「これからどうしていったらいいか」という模範解答なんてない。受けとめようがない。模範解答のない模範解答を求めている愚かな人間の心を写し出しているようにも見えてくるというのが私の現在の正直な考え方である。

「ケセン語聖書の山浦 玄嗣さん」

ケセン語訳聖書の著者として有名な岩

手県大船渡市の開業医山浦 玄嗣（やまうら・はるつぐ）氏は自らも東日本大震災で大津波の被害を受けた経験を記した著書『『なぜ』と問わない』（教団出版局）で、こう記している。テレビや新聞のマスコミがわんさと押しかけ、「神がいるならなぜ」と異口同音に同じ事を聞くことに対して、うんざりとした表情で憤然と答える。「そんな問いに意味はない」と。「何でこん目に遭わなければならぬんだ」と問う地元の被災者など1人もいなかったとさえ断言する。静かに淡々と受け止め、黙々と被災者は事後の後始末、未来に向けて確実な希望と確信をもって対処していると、山浦氏は著書でしみじみと語っている

「こんな酷いことをする神様なんて」

「こんな酷いことをする神様なんて信じられなくなった」「こんな罪もない善良な赤ちゃんや子供たちまで殺してしまう神様なんて存在していないことがあらためてこの出来事を通して分かった」「いや、もともと神様なんていなかった」と、さまざまところでこんなやりとりが飛び交ったのではないかと思う。実際に「アエラ」という雑誌にこんな活字が堂々と掲載されてもいた。

「神の存在を問う歴史の繰り返し」

身近な人の死に直面したり、自らに起きたりしたさまざまな不幸な出来事に対して「神様の存在」をいつも問うてきた繰り返しの歴史ではなかったか。イエス・キリストの誕生したイスラエル、パレスチナ地方はいまだに暴力という悪の連鎖が続いている現実がある。それは私たちにとっては「対岸の火事」としてしか捉えられなかった。

自らの身に大事故や大災害などの不幸な出来事が起きて初めて「これはいったい何なんだ」と、のたうち回っている姿が現実の私たちの今の哀しい生き様なのだと思う。

「各種震災シンポジウム」

震災直後から教団や教区をはじめ、キリスト教関係者が主催する東日本大震災に関するシンポジウムや講演会に行く度も参加して話を聞いた。どれもこれも胸を打つものはなかった。その中で少し印象に残った部分を紹介したい。それは昨年(2011年)8月29日に東京の銀座教会で行われた東日本大震災緊急シンポジウムで東京神学大学の芳賀 力教授は、先ほどの問いに対してこう話された。神義論、苦難への問い、は救済論、救済への問いにならなければ意味がない。ただ神を理性の法廷に引きずり出して訴える訴訟論的な神義論ではなく、救済論へと導く神義論が必要で、神を訴える訴訟論的な神義論は、しばしば自分たち人間の罪や過ちを棚に上げて神を糾弾するということが行われる。しかし本当はそこで普段は神を軽視している私たち人間、自分に都合の良い神しか求めないこの世界の在り方が問われている。

「イエスの生涯」と「キリストの誕生」

「自分に都合の良い神しか求めない」という言葉を聞いたとき、私はかつて読んだことのある遠藤周作の小説「イエスの生涯」と「キリストの誕生」という文春文庫を思い出した。遠藤 周作の聖書理解や受け止め方に共感を覚えたのを記憶している。特に小説「イエスの生涯」に描かれたイエスのガリラヤでの盲目的な人の目を開かせた話

や歩けない老人をすたすた歩かせるなどの数々の奇蹟の行いにより民衆を強力に引きつけたイエスが十字架上では「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ」(我が神、我が神、なぜ私をお見捨てになったのですか)と叫ぶ「無力なイエス」に失望し、あれだけ慕った民衆が一斉に「十字架にかけよ」と付和雷同とも言うべき掌を返すような仕打ちに、身勝手な民衆の信仰の在り方を問題にしている。民衆だけでなく、イスカリオテのユダどころか鶏が啼く前に3度「イエスを知らない」と、師を見捨てたペトロら弟子のすべてがイエスを裏切ったのはなぜか、遠藤 周作はしつようにその謎に迫っていく。そのプロセスに私は引き込まれた。

「民衆に寄り添うイエスの姿」

遠藤は小説「キリストの生涯」でこう描いている。「現代人の多くは日本人は一この言葉からイエスの絶望を読みとろうとする。十字架上での彼に救いの手を差し伸べず、奇蹟一つ起こさぬ父なる神にたいする悲しみと訴え、絶望と哀訴とをそこに見つけようとする」と批判している。そうではなく、「十字架上で何の奇蹟も行えないイエスなんて何の魅力もない」という身勝手な人間の弱さに対して、イエスは十字架上の今際の際でさえ、人々の許しと救いを求めた。民衆にどこまでも寄り添う姿勢を見せたイエスの本当の姿に、死んでから気付く。

「神と私の平和」

震災後「絆」という言葉がもてはやされているが、人々の絆と同時に神との強い絆こそ「神と私の間の平和」こそが私たちの救いのキーワードではなからうか。「神と私

の平和」があつてこそ、人々との平和や絆を強く結べる鍵になるのではないか。十字架の贖いと復活により民衆も弟子たちも初めて奮い立つことが出来たという遠藤 周作の聖書理解を素直に受け入れることが出来たと同時に、そこにある種のリアリティーが迫ってきたのを強烈に覚えている。

「イエスの再発見が出発点」

もう少し引用してみたい。「それまで知らなかった、気付かなかった、誤解していた師を再発見したこと—それが出発点となる。イエスは現実に死んだが、新しい形で彼らの前に現われ、彼等の中で生きはじめたのだ。それは言いかえれば彼等の裡にイエスが復活したことに他ならない。

「解決への道」

まこと復活の本質的な意味の一つはこの弟子たちのイエスの再発見なのである」と遠藤はこう結論付けているのだ。それぞれの震災に関するキリスト教集会での共通項も、イエスの十字架の死を考えること、仰ぐことが震災からの心の復興を遂げるキリスト者の問いに対する解決への道だと指し示しているようにも感じた。

「法王の、私にも分かりません」

今年（2012年）の「信徒の友」5月号に掲載されたこんな文章が印象に残った。今年3月11日、カトリック麴町聖イグナチオ教会で行われた東日本大震災一周年に当たり「追悼と再生を願う合同祈祷集会」での岡田 武夫東京大司教の説教で、こう書かれている。「岡田大司教は説教の中で、ローマ教皇ベネディクト16世が日本の少

女から東日本大震災に関して『どうしてこんなに怖い思いをしなければいけないのですか』と問われたのに対して、『その理由は私にも分かりません』と言いつつも、『イエス様も理由もなく苦しみを負われ、十字架につかれたのです』と応えたと紹介されました。これが私が感じた素朴な問いに対する答えではなかったかと捉えている。

「神様がより身近な存在に」

「大震災をどう受け止めたか」というより、「そこで何を感じたか」という似て非なる表現をすれば、私にとって「神様がより身近な存在になった」「神様なくして私はありえない」という確信を得たというのが、上尾合同教会の教育委員会から信徒セミナーに求められたことに対する私の一信徒としての思いと致したく思います。

[これは2012年7月28日の礼拝後、上尾合同教会で開催された信徒セミナーで発題を求められたことに対する発表に、内容をさらに付け足して、あらためてここに記したものだ。ご了承を。]

(上松 寛茂・上尾合同教会員、地区壮年部協力委員)

地区壮年部 最近 15 年間の活動

1998年

- 2月22日 大宮教会 高齢者問題懇談会 「高齢化社会とキリスト者の役割」
講師：河 幹夫厚生省社会局施設人材課長（同盟基督教団和泉福音教会員）
- 5月17日 埼玉新生教会 総会 開会礼拝 説教「共に歩む教会 担い合う宣教の業」
三永旨従所沢武蔵野教会牧師
- 9月23日～24日 県民活動センター泊修養会伊奈町「人生の秋を豊かに」一聖書における老いの意味一
講師：最上 光宏浦和東教会牧師
信徒発題「信仰の継承」抜井 太一郎壮年部委員（志木教会員）
- 11月15日 大宮教会 信徒修養会「会堂建築を成功させるには」信徒発題：松下 充孝大宮教会員
「信仰継承の成果をあげるには」信徒発題：上松 寛茂上尾合同教会員

1999年

- 2月21日 大宮教会 講演会「いと小さき者の一人に」
講師：天羽 道子かにた婦人の村施設長（千葉県館山市大賀）
- 5月16日 大宮教会 総会 開会礼拝 説教「私も働く」中谷 清熊谷教会牧師
- 6月20日 大宮教会 講演会「伝道へー礼拝からの出発」
講師：小島 誠志日本基督教団総会議長、松山番町教会牧師

2000年

- 5月28日 上尾合同教会 総会 開会礼拝 説教「福音の伝播クレ・シモンに学ぶ」高橋悦子桶川伝道所牧師
出席 18 教会 32 人
- 5月28日 壮年部創部 30 周年記念誌発行 総会出席者及び各個教会に配布
- 10月29日 大宮教会 講演会「伝道へー礼拝からの出発」講師：山崎 美貴子明治学院大学副学長
出席 23 教会 69 人

2001年

- 2月25日 埼玉新生教会 総会 開会礼拝 説教「真の富」田中 かおる安行教会牧師 出席 13 教会 39 人
- 2月27日 大宮教会 講演会「ひとにぎりの土」
講師：小澤 貞雄秋津教会牧師（多摩全生園）
- 10月14日 各ブロック壮年会員によるシンポジウム「魅力ある教会づくり」（信仰の継承と教会員の高齢化）

2002年

- 2月24日 大宮教会 総会 開会礼拝 説教「失われるもの、実るもの」柳下 仁北川辺伝道所牧師
- 5月26日 大宮教会 講演会「自由において共に生きよう」
講師：関田 寛雄青山学院大学名誉教授（礼拝説教も）

2003年

- 2月23日 埼玉新生教会 総会 開会礼拝 説教「神の御賞賛を目指して」中村 忠明埼玉新生教会牧師
- 9月14日 大宮教会 講演会 開会礼拝 「白髪になっても実を結ぶ」山岡 創坂戸いずみ教会牧師
講演「老いを生きる」講師：阿部志郎横須賀基督教社会館長、神奈川県保健福祉大学長

2004年

- 2月15日 大宮教会 総会 開会礼拝 説教「主を待ちのぞむ」鎌田 康子越谷教会副牧師
- 5月16日 大宮教会 講演会 開会礼拝「枯れた骨の復活～預言者エゼキエルの体験～
講師：大宮 溥日本聖書協会理事長、成瀬が丘教会牧師、阿佐ヶ谷教会名誉牧師
「聖霊の息吹を受けて」一信仰の継承を願って一

2005年

- 2月20日 大宮教会 総会 開会礼拝 説教「カナの婚礼」森 淑子狭山伝道所牧師
- 7月17日 大宮教会 「認知症の正しい理解一心のケアと信仰一」
講師：長谷川 和夫認知症介護研究・研修東京センター長
聖マリアンナ医科大学名誉教授、銀座教会員
- 開会礼拝 「主の恵みを共に～認知症への主の眼差しを読みとろう～
石川 栄一北本教会牧師
- 9月23日 大宮市民会館 1日修養会「共に学び、共に考えよう～教会の成長～」
講師：疋田 國磨呂大宮教会牧師

2006年

- 2月19日 大宮教会 総会 開会礼拝 説教「私は福音を恥としない」最上 光宏浦和東教会牧師
- 7月30日 大宮教会 講演会 「老いをどう生きるか～希望を支える信仰と老後～」
講師：児島康夫川越キングス・ガーデン施設長日本ホーリネス教団川越のぞみ教会員
- 開会礼拝 「聖霊による無償の賜物が一人一人に」疋田 勝子大宮教会副牧師

2007年

- 2月18日 大宮教会 総会 開会礼拝 説教「祝福と賛美」柳田 剛行 台湾基督教会牧師
出席15教会 28人
- 9月17日 大宮教会 1日修養会「共に生きる生活～教会の活性化～」講師：疋田 國麿呂大宮教会牧師
- 11月25日 埼玉新生教会 講演会「国籍は天に」
～特別養護老人ホーム・スマイルハウスのターミナルケアの試み～
講師：仲矢 杏子スマイルハウス施設長
開会礼拝 「ただ一つのこと」 金田 佐久子西川口教会牧師

2008年

- 2月17日 大宮教会 総会 開会礼拝 説教「壮年の使命」竹内紹一郎 深谷西島教会牧師
出席14教会 26人
- 6月29日 大宮教会 修養会 開会礼拝 説教「生き生きと共に生きる教会生活」疋田國麿呂 大宮教会牧師
主題「御言葉の聴き方について・共に生きる教会生活」
～ボンヘッファーの真実な交わり～
講師：疋田 國麿呂大宮教会牧師 出席：13教会 60人
- 11月16日 大宮教会 こうえん会 福音落語「めめんともり・石打ち」出席：14教会 66人
出演：古琴亭志ん軽（本名・齋藤 和夫氏 代々木上原教会員）
詩吟「西郷 南州・いつくしみ深き」出演：豊川耕颯（本名・豊川昭夫氏越谷教会員）

2009年

- 2月15日 岩槻教会 総会 開会礼拝 説教「隅の親石」川中 真 岩槻教会牧師 出席13教会 31人
- 7月19日 大宮教会 修養会 開会礼拝 説教「すべての民をわたしの弟子にしなさい」
疋田 國麿呂大宮教会牧師
主題「これでいいのか？今の教会」～データから10年先の姿を観る～
（資料 教団50年データ分析と提言 制作：教団予算委員会 CD-ROM 映写）
講師：疋田 國麿呂大宮教会牧師 出席：16教会 70人
- 11月29日 大宮教会 講演会 開会礼拝 説教「現代に合った伝道パラダイムの転換」
疋田 國麿呂大宮教会牧師
主題「四世代が喜び集う教会形成」～高座教会の取り組み～
講師 カンバーランド長老キリスト教会 高座教会 松本 雅弘牧師
出席12教会 71人

2010年

- 2月28日 大宮教会 総会 開会礼拝 説教「御言葉が栄える」 石橋 秀雄越谷教会牧師
出席14教会 23人
- 7月18日 大宮教会 修養会 主題「神の国のビジョンに生きる教会」～ゆりかごから天国まで～
講師 日本同盟基督教団 西大寺キリスト教会 赤江 弘之牧師
出席14教会 54人
- 11月28日 大宮教会 講演会 開会礼拝 説教「主に用いられる弟子たち」疋田 國麿呂大宮教会牧師
主題「誰でもホッとする群れに向かって」～地域との結び付きを大切に教会～
講師 日本同盟基督教団 土浦めぐみ教会 清野 勝男子牧師
出席14教会 60人

2011年

- 2月27日 大宮教会 総会 開会礼拝 説教「さあ、見に来て下さい」 木ノ内 一雄 川越教会牧師
出席15教会 32人
- 6月26日 埼玉新生教会 開会礼拝 説教「分かち合う喜び」 埼玉地区委員長 土橋誠牧師 飯能教会
講演会 主題「戦後最大の危機の中で」～教団・教会・私たちは～
講師 日本基督教団 総会議長 石橋 秀雄牧師 出席15教会 41人
- 11月13日 大宮教会 開会礼拝 説教「主イエス・キリストの貧しさによって」
聖学院大学学長 阿久戸光晴先生
講演会 主題「福島第一原発事故・脱原発をどのように受け止めるか」
講師 聖学院大学学長 阿久戸光晴先生 出席11教会 37人

2012年

- 2月19日 大宮教会 総会 開会礼拝 説教「支え合う教会」栗原清牧師 武蔵豊岡教会 出席15教会 28名
- 6月17日 大宮教会 開会礼拝 説教「つながってこそ、教会」関東教区副議長 飯塚拓也牧師 竜ヶ崎教会
講演会 主題「今こそ、『つながり』の時」～共に苦しみ、共に喜ぶ～
講師 関東教区副議長竜ヶ崎教会 飯塚拓也牧師 出席9教会 30人
- 11月11日 大宮教会 開会礼拝 説教「苦難と希望」アジア学院校長 大津健一先生
講演会 主題「苦難と希望」～地震・放射能被害に向き合って～
講師 アジア学院アジア農村指導者養成専門学校校長 大津健一先生出席11教会 37人

定期総会・委員会の開催 2012年度 (2012年2月1日～2013年1月31日)

定期総会 2月19日 大宮教会

委員会 2月19日 大宮教会、3月18日 埼玉和光教会、5月20日 越谷教会、6月17日 大宮教会、
7月22日 西川口教会、9月23日 春日部教会、11月11日 大宮教会、2012年1月20日 上尾合同教会

2013年度委員会組織

委員長 松下 充孝(大宮) 書記 市川 浩(飯能) 会計 田島 章義(春日部)

委員 岩井田 慎二(埼玉和光) 荻田 久次郎(越谷) 柏田 實(西川口) 高橋
幸好(浦和東) 瀧川 市郎(熊谷) 土門 嘉樹(上尾合同) 樋口道成(岩槻)

協力委員 上松寛茂(上尾合同) 島崎 光雄(武蔵豊岡)

地区委員 壮年部担当 小岩 晃(上尾合同)

日本基督教団関東教区

埼玉地区壮年部機関誌

「埼玉・教会・壮年」NO. 12号

2013年2月17日発行

発行人：松下 充孝 編集人：上松 寛茂